

水戸市大串遺跡

常澄中学校増改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

茨城県水戸市

平成八年三月

水戸市大串遺跡

常澄中学校増改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

茨城県水戸市

平成八年三月

序

『大串遺跡』は那珂川右岸の水戸東南台地先端部に位置し、本市東部に当たる塩崎町地内に所在しております。

この『大串遺跡』の周辺は、奈良時代の昔から注目され『常陸国風土記』那賀郡の条に登場する国指定史跡『大串貝塚』をはじめ、数多くの遺跡が確認されており、古くから様々な時代の生活が営まれ繁栄してきた地域であると考えられます。

埋蔵文化財は、工事等により一度破壊されると二度と原状に復すことのできないものであり、郷土の歴史説明はもとより将来の文化創造の基礎となることから、私たちは大切に保存しながら後世へ伝えていかなければなりません。

近年、大規模開発等による都市化の様相が強まる中で、これらの埋蔵文化財の現状保存は非常に困難になりつつありますが、本市においてもその意義や重要性を踏まえ、文化財保護法並びに関係法令に基づいた保護・保存に努力しているところでございます。

このたびは、当地域内の常澄中学校増改築計画により、遺跡への影響を及ぼすことが予想されたため、文化財保護の観点から事前に十分な協議検討を重ね、記録のうえで保存の措置を講ずることとし、発掘調査を実施するに至ったものであります。

調査においては、縄文時代前期前半の竪穴式住居址4軒が検出され、さらに土器・石器をはじめ釣針・刺突具などの人工遺物、動物遺存体などが多量に出土し、その質・量ともにこれまでの調査結果を大きく上回る成果を収めました。

『大串貝塚』において初めての学術調査が行われた昭和11年から、実に60年を経過した今日、この貝塚に直結するものとしては過去に出土例の無い、貝塚人たちの居住域を発見でき、また、貝塚の規模からこの台地上にはかなりの集落群が形成されていたことがうかがえるなど、『大串貝塚』とともに本遺跡の今後の保護・保存を図るうえで極めて重要な資料を得ることができました。

ここに刊行いたします本書が、今後の埋蔵文化財の保護・保存はもとより、かけがえのない貴重な文化財に対する意識の高揚と学術研究等の資料として、広く御活用いただければ幸いに存じます。

終わりに、本調査並びに本書の刊行に当たり御尽力いただきました日本考古学協会会員井上義安先生をはじめ調査関係者の皆様、御指導・御助言をいただきました茨城県教育庁文化課並びに水戸教育事務所の皆様に心から感謝申し上げます。

平成8年3月

水戸市教育委員会

教育長 堀川賢壽

例 言

- 1 大串貝塚は、水戸市塩崎町に所在する。
- 2 発掘調査は、常澄中学校の増改築工事に伴うものである。
- 3 発掘調査は、平成8年2月15日に開始し、同年3月8日に終了した。
- 4 確認および発掘調査の面積は、A地点約540m²、B地点約30m²、C地点20m²の合計590m²である。
- 5 発掘調査は、井上義安を担当者とし、鈴木浩子・飛田信雄・江橋和子・仁平妙子を補佐員として実施した。
- 6 本書に掲載した写真は、井上義安・鈴木浩子・飛田信雄が撮影したものである。
- 7 出土遺物の整理と図面の作成は、井上義安・鈴木浩子の指導により安真奈美・江橋和子・石崎洋子・仁平妙子が従事した。また、動物遺存体の同定と分析については、早稲田大学教育学部の金子浩昌氏にご教示とご寄稿をたまわった。なお、花積下層式関係文献の探求には、一部を埼玉県埋蔵文化財調査事業団の村田健二氏の手を煩わした。
- 8 出土遺物の整理は、大串貝塚ふれあい公園L・E・Cセンターにおいて、平成8年3月9日から3月25日まで行った。
- 9 本書の執筆と編集は、井上義安・Lisa J. Ebisawa(欧文)・鈴木浩子・仁平妙子が担当した。
- 10 出土遺物は、水戸市教育委員会(水戸市中央1丁目4番1号)が保管している。

目 次

原色図版

序

水戸市教育委員会 教育長 堀川 賢壽

例 言

目 次

挿図目次

図版目次

Ōkushi Shell Mound

Outline of the Excavation

第 一 章 緒 言	1
第 二 章 発掘調査の概要	2
1 A地点	2
2 B地点	2
第 三 章 竪穴住居址の調査	5
1 第一号住居址	5
2 第二号住居址	6
3 第三号住居址	8
4 第四号住居址	8
第 四 章 出土遺物の概要	12
1 土器	12
2 石器	26
3 骨角器	28
4 貝製品	28
5 未成品・加工痕のある鹿角	28
第 五 章 動物遺存体の概要	32
1 貝類	32
2 魚類	34
3 獣類	34
4 鳥類	34
第 六 章 まとめ	35
別 編 大串貝塚出土の脊椎動物遺体と骨角製品	38
発掘調査関係者	

挿 図 目 次

第一 図	発掘調査区域図	3
第二 図	A地点遺構分布図	4
第三 図	第一号住居址実測図	5
第四 図	第二号住居址実測図	7
第五 図	第三・四号住居址実測図(1)	10
第六 図	第三・四号住居址実測図(2)	11
第七 図	文様模式図	13
第八 図	第一号住居址出土土器実測図	14
第九 図	第二号住居址出土土器実測図	15
第一〇 図	第三号住居址出土土器実測図	16
第一一 図	第三・四号住居址出土土器実測図	17
第一二 図	第四号住居址出土土器実測図(1)	18
第一三 図	第四号住居址出土土器実測図(2)	19
第一四 図	第四号住居址貝層出土土器実測図(1)	20
第一五 図	第四号住居址貝層出土土器実測図(2)	21
第一六 図	第四号住居址貝層出土土器実測図(3)	22
第一七 図	第四号住居址貝層出土土器実測図(4)	23・24
第一八 図	確認調査出土土器実測図	25
第一九 図	住居址出土・表採石器実測図(1)	26
第二〇 図	住居址出土石器実測図(2)	27
第二一 図	第四号住居址貝層出土骨角器・未成品実測図	29
第二二 図	第四号住居址貝層出土貝製品実測図	30
第二三 図	第四号住居址貝層出土加工痕のある鹿角実測図	31
第二四 図	ヤマトシジミ(上)・ハマグリ(下)殻長分布図	33
第二五 図	第四号住居址貝属出土動物遺存体実測図	34

図 版 目 次

- 図版第 一 1 大串遺跡A地点の現状〈西から〉
2 大串遺跡B地点の現状〈北から〉
- 図版第 二 1 第一号住居址の遺物出土状態〈西から〉
2 第二号住居址の遺物出土状態〈北から〉
- 図版第 三 1 第三号（上）第四号（下）住居址の全景〈西から〉
2 第四号住居址（下）の貝層堆積状態〈西から〉
- 図版第 四 1 第四号住居址の貝層堆積状態〈北から〉
2 第四号住居址の貝層断面〈北から〉
- 図版第 五 1 第四号住居址の遺物出土状態(1)
2 第四号住居址の遺物出土状態(2)
- 図版第 六 第三・四号住居址出土土器
- 図版第 七 1 貝層出土の動物遺存体(1)
2 貝層出土の動物遺存体(2)
- 図版第 八 1 貝層出土の動物遺存体(3)
2 貝層出土の動物遺存体(4)
- 図版第 九 1 貝層出土の骨角製品(1)
2 貝層出土の骨角製品(2)
- 図版第一〇 1 貝層出土の骨角製品(3)

Ōkushi Shell Mound

The work, *Hitachi no kuni fudoki*, was compiled in the Nara period, in the 6th year of the Wadō era (713AD), in accordance with an imperial edict of the Emperor Genmei. In this work the shell mound is said to be the work of a giant, who in ancient times stretched out his hand from the hill of Ōkushi to dig *hamaguri* (clams) from the shore, piling the shells into a great mound as he ate them.

Part of the shell mound remains extant, on the plateau on which Tsunozumi Junior High School stands (Location A, now obliterated), and on its southern and eastern slopes (Locations B and C respectively).

The shell mound was formed during the first half of the Early Jōmon period, when sea levels were at their highest.

Depending on the location, the shell strata vary in thickness from several tens of centimeters to over 1 meter in places.

The shellfish from which the shell strata are composed consist primarily of the *Yamato shijimi* (*corbicula japonica*) which inhabit brackish water zones, and also include *magaki* (Japanese oyster; *Crassostrea gigas*), *hamaguri* (clam; *Meretrix lusoria*), *sazae* (spiny Turban shell; *Turbo cornutus*), *akanishi* (rock shell; *Rapana thomasi*), *awabi* (abalone; family Haliotidae) and other small snails. The strata also include pottery, stone tools, and bird, animal and fish bones including those of wild boar (*Sus scrofa leucomystax*), sika deer (*Cervus nippon*), *kurodai* (black porgy; *Mylio macrocephalus*), *suzuki* (sea bass; *Lateolabrax japonicus*), *fugu* (globefish; family Tetraodontidae) and rays.

Bone fish hooks and fish spears, stone arrowheads, shell blades, shell bracelets and other artifacts have also been unearthed from the shell mound, giving us an insight into the hunting, fishing and gathering practices and way of life of the people of the Ōkushi Shell Mound.

Outline of the Excavation

Due to the deterioration with age of the school buildings of Mito City Tsunozumi Municipal Junior High School, plans for the construction of new buildings and extensions have been made. As the plateau on which the school stands is believed to have been the site of the village of the people of the Ōkushi Shell Mound, an excavation was undertaken prior to the commencement of building work.

The excavation was carried out between 9 January and 14 February 1996 under the supervision of the Mito Municipal Board of Education Lifelong Learning Section, and was directed by Mr. Inoue Yoshiyasu of the Japanese Archaeologists Association.

Two locations were excavated, one to the south of the school buildings (Location A) and the other to the north (Location B), with a combined area of approximately 600m².

At Location A the remains of one oval-shaped dwelling and one dwelling of uncertain shape were excavated. A large quantity of pottery shards covering the transition from the Hanazumikasō-type to the Sekiyama-type pottery of the Early Jōmon period was unearthed from both dwellings.

Remains of two dwellings were excavated at Location B, however as both had been obliterated, the shapes of the dwellings could not be ascertained. From one of these (Dwelling Site No. 4), an accumulation of a large quantity of discarded shells was found.

The shell strata consist primarily of *Yamato shijimi* (*corbicula japonica*), admixed with solid blocks of *magaki* (Japanese oyster; *Crassostrea gigas*) and *hamaguri* (clam; *Meretrix lusoria*); and a small amount of *sazae* shells (spiny Turban Shell; *Turbo cornutus*) can also be seen. Fish bones including those of *kurodai* (black porgy; *Mylio macrocephalus*) and *suzuki* (sea bass; *Lateolabrax japonicus*) and fragments of animal bones such as those of wild boar (*Sus scrofa leucomystax*) and sika deer (*Cervus nippon*) were also discovered among the shell strata.

The human-made artifacts unearthed range from pottery (from Hanazumikasō-type to Sekiyama-type) to several stone arrowheads, deer horn fish hooks and harpoons for spear- ing, among other items.

The above is an outline of the excavation carried out. The shells, fish and animal bones, etc, unearthed have allowed us to reconstruct the natural environment in the environs of the estuary of the Naka and Hinuma Rivers during the time of high sea levels in the Early Jōmon

period, and the human artifacts unearthed have provided excellent data with which to elucidate the subsistence activities of the Ōkushi Shell Mound people which evolved in this setting, thus providing much valuable information in terms of archaeological prehistory.

第一章 緒言

国の史跡に指定（昭和45年5月11日）されている大串貝塚は、茨城県を代表する縄文時代前期の貝塚である。

本貝塚は、標高15.5m台地の先端部、東・南側斜面を中心に貝層が露出し、奈良時代の『常陸国風土記』（713）編さん時から識者間に注目されてきている。明治21年（1889）のころ以降になると、多くの著名な研究者たちが来訪し、部分的に小発掘や学術発掘を試み、さまざまな研究考察を発表してきた（文献省略）。

しかるに、台地上の畑地（現在の常澄中学校敷地）については、一部に貝殻が散在してはいたが、ほとんどその内容は不明のままであった。

戦後の昭和30年3月31日に、常澄村が誕生すると、この場所に統合中学校（常澄中学校）の設置が決定（昭和33年9月30日）し、木造モルタル校舎の建設工事（第1・2期）が開始された。その後、昭和40年に鉄筋2階建特別教室（理科・技術）、翌41年に防音鉄筋3階建校舎の建設工事が行われてきた。

このたび当時の校舎は老朽化をきたし、建替工事を行う時期になった。水戸市教育委員会は、遺跡の歴史的重要性を考慮し、建設予定地内の3地点を選び、遺構の有無について確認調査を実施してきた。その結果、校舎の南側と北側の2か所において、竪穴住居址と住居址内に廃棄した良好な貝層を発見することができた。

竪穴住居址と貝層は、いずれも貝塚形成期に比定されるもので、縄文時代前期に属する。今回の確認事実に基づけば、常澄中学校の敷地内には、大串貝塚人の集落が形成されていたとみて大過ないといえよう。

発掘調査は、平成8年2月15日―3月8日まで、市教育委員会学校教育課・生涯学習課の指導により実施し、竪穴住居址・貝層内から後述する人工遺物や動物遺存体を発見でき、大串貝塚の地域的性格の解明に大きな成果を収めたと思う。

私たちは、平成2年10月にも「大串貝塚周辺におけるまちづくり」事業の一環として、確認調査を実施し、今回また常澄中学校の建替工事に伴う発掘に従事する機会に恵まれ、この貝塚から多くの先史学的事象を学ぶことができた。発掘調査と整理作業にご高配・ご指導をたまわった市教育委員会学校教育課・生涯学習課、常澄中学校、大串貝塚ふれあい公園L・E・Cセンター、さらには厳冬期の発掘に続き整理作業に従事された諸氏に深い感謝の意を表したいと思う。

第二章 発掘調査の概要

新校舎建設地の3地点、現校舎東側の旧テニスコート（A地点）、同北側の空地（B地点）と玄関前の植込み（C地点）に確認調査を実施した結果、A・Bの両地点から住居址が発見されたけれども、玄関前のC地点には遺構が存在しなかった。

1 A地点

面積約600㎡の旧テニスコートである。この地内に幅2,5～3,0mのトレンチ5本を東西・南北に設定し、表土の除去を行った。現表土下約20cm前後のローム面には、昭和33年当時の木造校舎のコンクリート基礎が残っており、攪乱穴や溝なども発見された。トレンチの西北端近くに住居址らしい遺構を2軒検出したため、この部分は拡張し調査を行った。両遺構ともにコンクリートの基礎工事と攪乱の影響を受けている。遺構は住居址と考えられ、内部から縄文時代前期の土器破片が多数出土した。

また、本調査区の南側崖端には、古墳の封土の一部（高さ約1,5m）が残っており、トレンチ内には周溝の検出を期待したけれども、ついに周溝と思われる掘込みは確認できなかった。周溝が存在するとすれば、多分裾部の駐輪場内になるであろう。

2 B地点

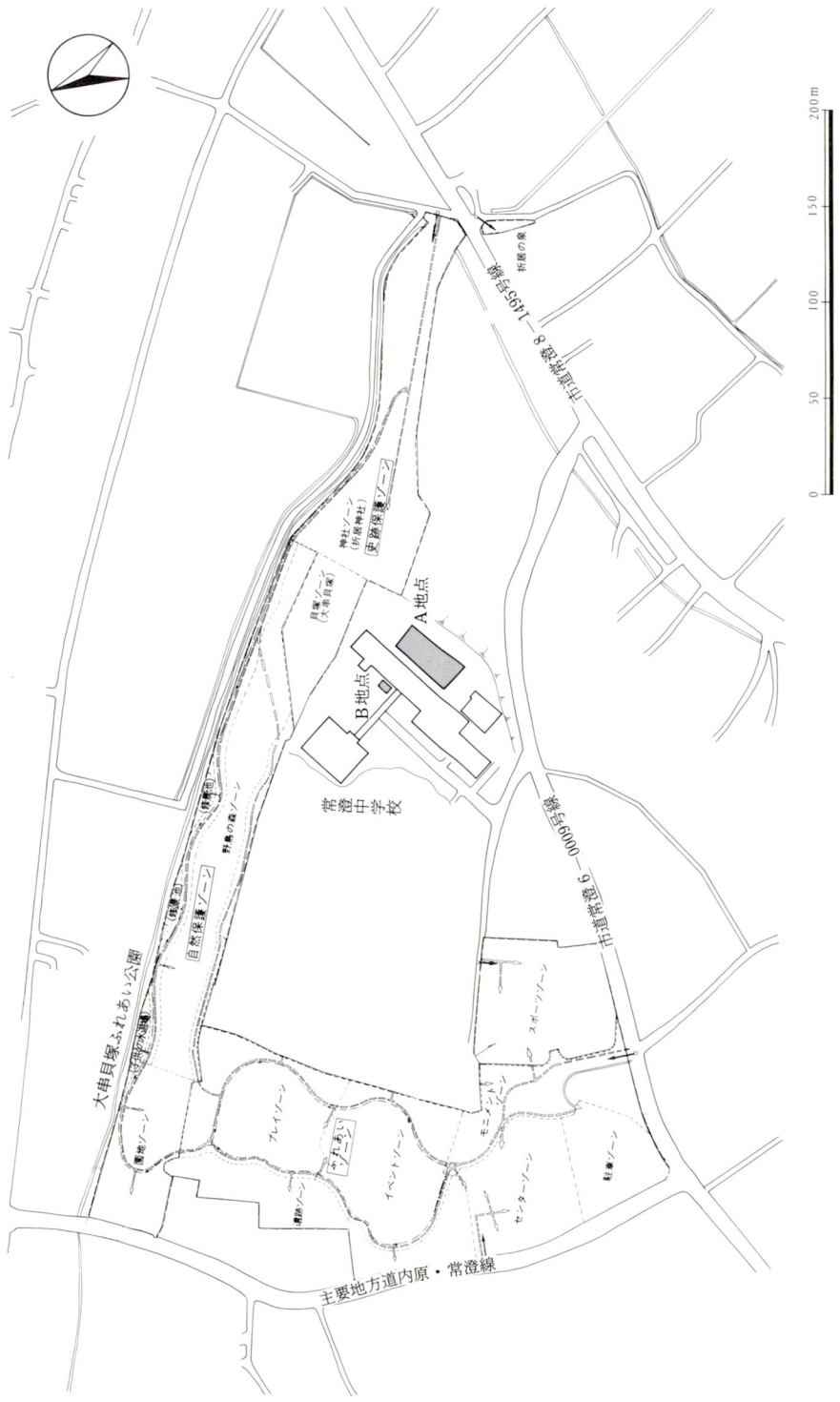
校舎東半部に接した北側の空地で、調査面積は僅かに28㎡である。ここは表土を全面除去した結果、現表土下約20cm前後のところにローム面が存在し、黒色土の落込みとヤマトシジミを主体とした良好な貝層が認められた。調査区の北端と西側の貝層内には、給水管・配水管などが埋設されており、ここでも遺構の一部が破壊を受けている。

遺構は住居址であり2軒が重複し、住居址間に新旧関係が認められる。

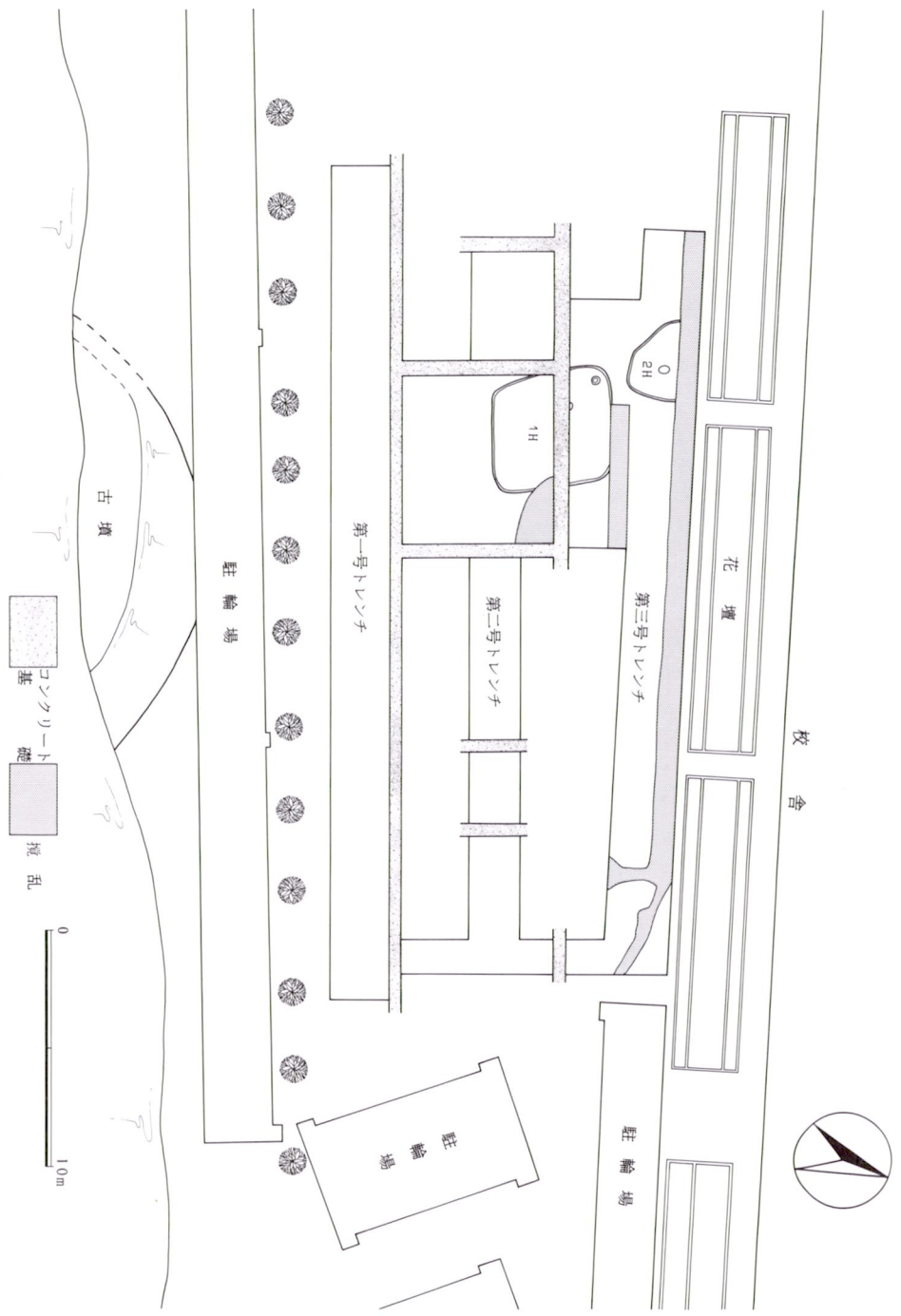
旧住居址（第三号）内には貝層がほとんどみられず、遺物は土器の破片と石鏃などである。新住居址（第四号）内には、床面上に貝層が30～40cmの厚さで堆積し、その廃棄の状態を観察できた。貝層に混入して出土した遺物は、土器の破片が最も多く、魚骨や獣骨片に加えて数例の骨角器・同未成品なども存在する。

出土土器は、A地点と同じく、いわゆる胎土に繊維を含有した前期前半の仲間である。

なお、昭和41年の頃、防音鉄筋校舎の付帯工事（浄化槽）に関係した鴨川清一氏（水戸市平戸町）によると、この地点にも小貝塚が発見されたという。今回の調査事実と鴨川氏の記憶を総合すると、台地上には数か所に小貝塚が存在したことになり、これらの貝塚は住居址内に廃棄されたものであろう。また、貝塚を伴わない住居址もあった筈で、この場所が大串貝塚人の居住地域を形成していたと考えられる。



第一図 発掘調査区域図



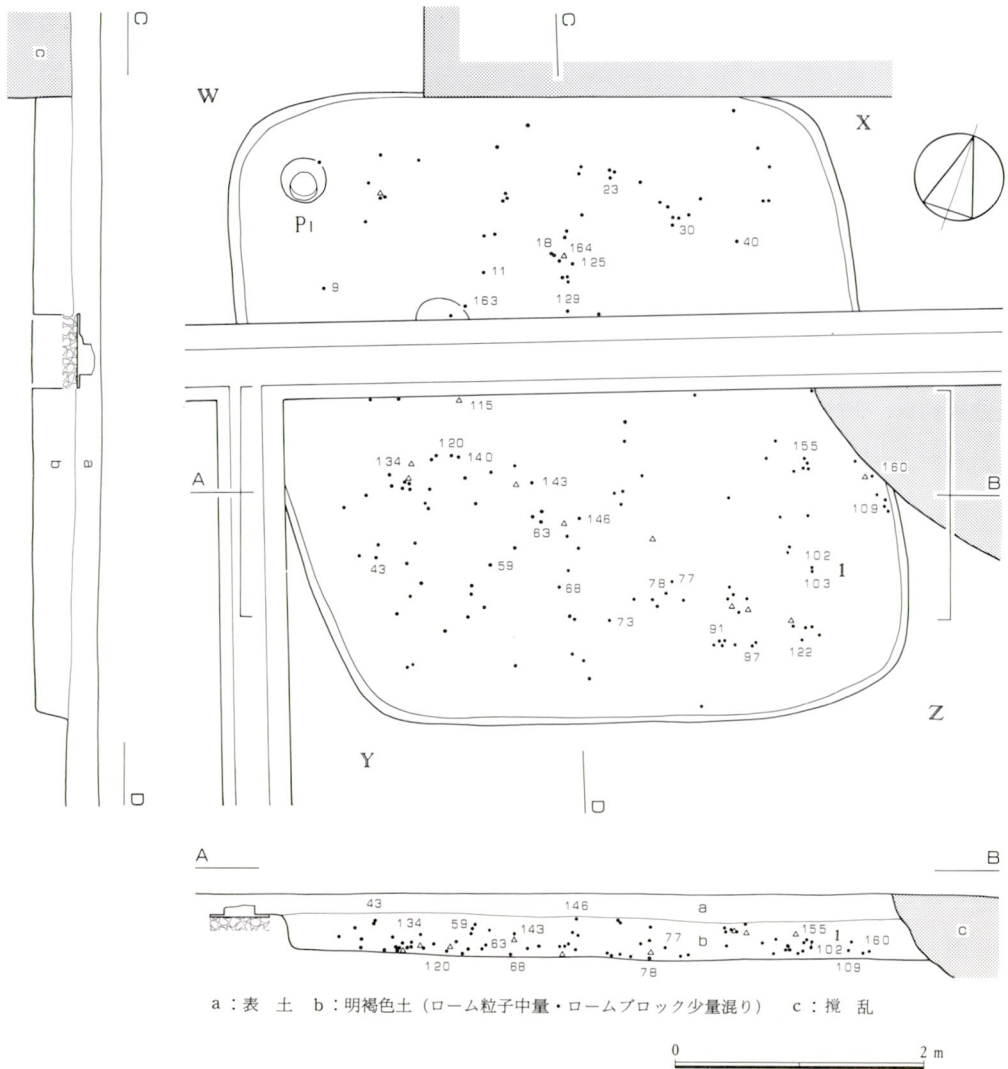
第二図 A地点遺構分布図

第三章 竪穴住居址の調査

住居址は、A地点に2軒（第一・二号住居址）、B地点に2軒（第三・四号住居址）の合せて4軒が発見された。各住居址とも工事や攪乱により、一部または大部分が破壊を受けている。

1 第一号住居址（第三・八・二〇図、図版第二）

遺存状態 中央部を幅60cmのコンクリート基礎が東西に走り、西壁で南北方向の基礎と直交する。攪乱は、北壁に接して長方形の区画が東西に、東壁の中央付近には、また別の土坑状のものが存在するけれども、発掘した住居址の中では最も遺存状態がよい。



第三図 第一号住居址実測図

規模 北壁(W-X間)約4.7m,南壁(Y-Z間)約4.5m,東壁(X-Z間)約4.7m,西壁(X-Y間)は若干長く約5.0mを測り,面積は約27㎡である。形状は多少ゆがんだ隅丸方形に近い。壁高は約30cmを有し,壁面には崩落した跡や壁直下に周溝は認められない。

床面 全体に硬度2～3に相当する。

ピット Wコーナー近くに直径約35cm,深さ40cmのピットが1本検出され,X・Y・Zコーナー付近では未発見である。

炉址 Wコーナー寄りのところに存在するが,大部分はコンクリート基礎の下に入り,規模と形状を確認できない。

埋没土 表土(攪乱層)の下が埋没土になる。ローム粒子を多量に含み,炭化物や焼土も微量に混入した明褐色の土砂である。

遺物の出土状態 遺物は土器の破片152点と自然石11点である。いずれも竪穴内に廃棄されたものと考えられる。ドットによって記録した遺物の平面分布は,中央から南半部に多くみられる。一方,これの垂直分布をA-Bセクションを中心に幅2.0mの範囲で観察すると,確認から床面上に散在し,傾向としては床面付近が多くなる。

土器破片の表裏関係を調べると,表83点(54%)+裏57点(38%)+立ち12点(8%)=152点(100%)という比率であり,従来の調査結果と大差がない。

接合資料は,下記の1例である。

接合資料1〈深鉢形土器〉102▽10・103▽13(口縁～胴部)

時期 出土遺物は,後述する花積下層式から関山式期の深鉢形土器破片を主体に出土しているが,住居址内には数個の黒浜式類似土器や浮島式の混入も認められる。

2 第二号住居址(第四・九・一九図,図版第二)

遺存状態 住居址の北半部は,幅75cmの溝状攪乱が略東西に走り,その北側に花壇・校舎が続くので発掘調査を断念した。残存部は南側の50%程度であろう。

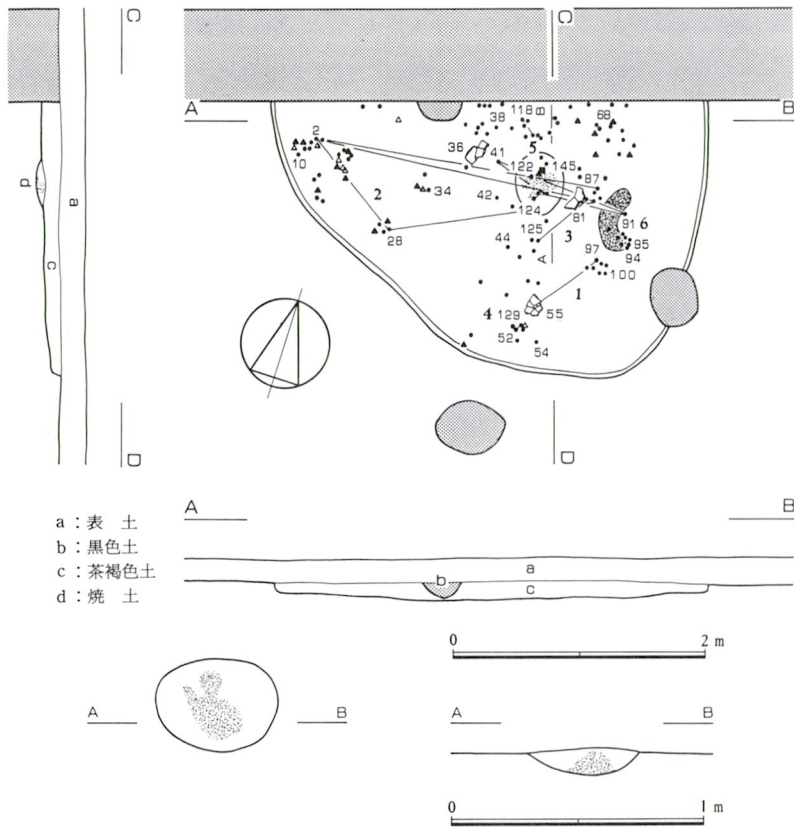
規模 A-Bセクション間約3.4m,C-Dセクション間約2.1mを測る。形状は不明であるが,不整形円形または楕円形に近いようにも思われる。ローム面からの壁高は15cm前後で中央付近が幾分くぼんでいる。

床面 炉址の周囲は硬度3,周縁部はそれよりやや軟らかくなる。

ピット 柱穴と思われるピットは検出されていない。

炉址 中央付近の床面上に存在し,大きさは南北約50cm,東西約35cmで,中央部は床面を5cm程掘りくぼめている。焼土は良好な状態で残っていた。

埋没土 表土下の埋没土の性状は,第一号住居址に類似したローム粒子の多い茶褐色土である。



第四図 第二号住居址実測図

遺物の出土状態 遺物の大部分は大小の土器の破片と若干の自然石、石鏃が1点である。炉址の周囲に多く散在し、西壁や南壁の近くにもみられる。このドット・マップから、廃棄の在り方までは推察できない。

接合資料は、下記の6例を抽出した。

接合資料1 〈深鉢形土器〉 55△11・97▽4 (口縁～胴部)

接合資料2 〈 同 〉 2△12・84▽9・28▽9・87△10・10△8・36▽11 (口縁～胴部)

接合資料3 〈 同 〉 81▽5・85△6・125△3 (胴部)

接合資料4 〈 同 〉 129▽5・52▽4 (胴部)

接合資料5 〈 同 〉 118▽23・120▽7 (胴部)

接合資料6 〈 同 〉 78▽10・41▽11・91△5 (胴～底部)

時期 出土した土器破片は、すべて胎土に繊維を含有した種類の花積下層式・関山式に属し、第一号住居址と同じく縄文時代の前期前半に比定できる。

3 第三号住居址（第五・六・一〇・一一・一九・二〇図，図版第三・六）

遺存状態 竪穴の南半部に校舎の排水溝，東側に植込みがあり，発掘できた部分は北半部の約8.0m²にすぎない。南半部の床面は校舎の下に入り，大部分破壊を受けているように考えられる。

規模 北壁のWコーナー付近は，第四号住居址に切断されているために，確認しえた壁の長さは約3.5m，東壁は約2.2mまでである。したがって，竪穴の形状は，方形または長方形を呈するように思われるが，大きさは不明である。壁高はローム面から約20cmを測る。

床面 内区に相当する空間は，凹凸のある硬度3に比定でき，周壁に近くなると若干軟らかくなる。

ピット・炉址 床面には確認されなかった。

埋没土 ローム粒子を含む褐色土である。

遺物の出土状態 発掘した竪穴内のほとんど全面に散在し，床面より僅かに上方～確認面間に包含されていた。発掘面積が狭小な割には，約300点の土器破片と使用痕を伴う自然石3個，石鏃3個が出土した。

接合資料は，ドット・マップに図示したような在り方で5例が抽出された。このなかには第四号住居址と接合できる資料もある。

接合資料1 〈深鉢形土器〉 498▽31・518△16（口縁部）

接合資料2 〈 同 〉 539△22・514△22（胴部）

接合資料3 〈 同 〉 82▽12・90▽20・27▽15（胴部）

接合資料4 〈 同 〉 536△18・527▽23（胴部）

接合資料5 〈 同 〉 551△21・580△21（胴部）

時期 出土土器は，すべて深鉢形を呈する縄文時代前期前半の仲間であり，主体となるものは第一・二号住居址と同じく花積下層式・関山式に属するものである。破片数は花積下層式に比定できるものが多くみられる。

4 第四号住居址（第五・六・一一～一七・一九～二五図，図版第三・四・六）

遺存状態 第三号住居址の西側を切断して構築した住居址で，調査区の北端に給水管，南側に校舎の排水溝，西側竪穴内に配水管2本の埋設と攪乱溝があり，発掘できた面積は僅かに8.4m²である。遺存状態は悪いけれども，床面上には良好な貝層が堆積していた。

規模 東壁の長さ約4.3mまで確認できたが，形状や大きさなどは不明である。竪穴は確認時の記録によると，ローム面を約40cm掘り込み構築している。壁の直下に周溝は存在しない。

床面 周壁の近くは硬度2，中央に移行するにしたがい硬度3となる。

ピット 柱穴と思われるピットは認められなかった。

炉 址 東壁から約1.0m西側に離れた床面上にあり、住居址内の位置的関係は不明である。長径約60cm、短径約40cm、深さ15cmの大きさを有し、底部に焼土・上部に灰が残っていた。

貝層の状態 埋没土の大半は廃棄した貝層によって占められる。A-Bセクションによると、床面上にローム・黒色土を僅かに混入したヤマトシジミの層aがあり、その上にマガキの純貝層b、ヤマトシジミの層c、マガキ層d、ヤマトシジミ層eが、約10cmの厚さで交互に堆積する。この層序はC-Dセクションでも同様の状態で観察された。ヤマトシジミを主体としたc層中から、ハマグリ・サザエなどが混在して発見されているが、ハマグリは個体で出土する例が多く、稀に数個がまとまって出る場合もみられた。この点はマガキの出方と対照的である。サザエは全貝層から疎らに出土し、その数は12個にすぎなかった。

なお、A-Bセクションの2地点（A・Bブロック、大きさ25×25×25cm）から採集した貝の組成は次のとおりである。

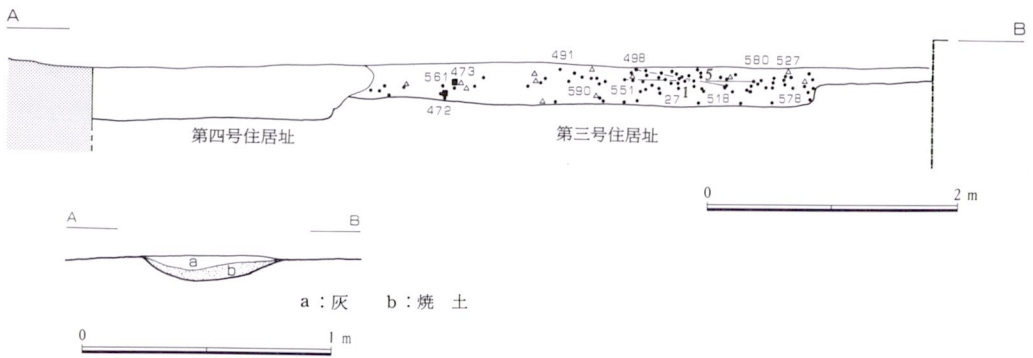
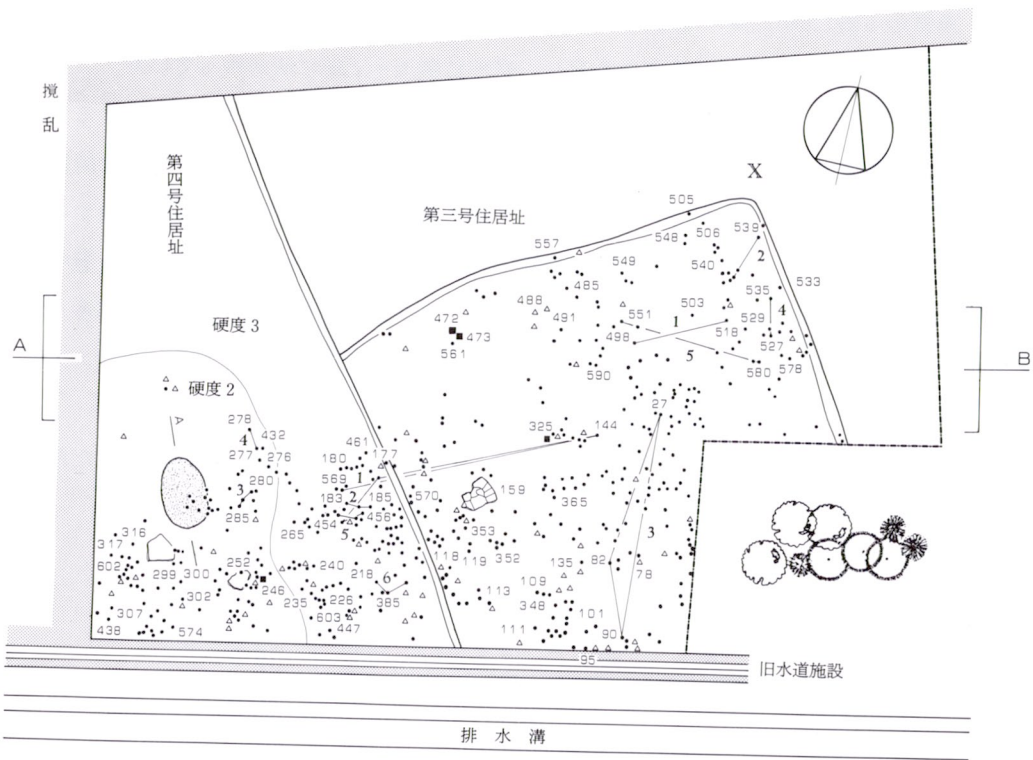
種 名	A ブ ロ ッ ク		B ブ ロ ッ ク	
ヤマトシジミ	1,149個	97.3%	620個	86.3%
マ ガ キ	30	2.5	74	10.3
ハ マ グ リ	2	0.2	2	0.3
ウネナシトマヤガイ	0	0	22	3.1
合 計	1.181	100.0	718	100.0

本貝層は、ヤマトシジミを主体としているが、同一貝層でも地点によって、100%に近い貝層から、85%前後の出現率を示す貝層など、組成内容に相違がみられる。ヤマトシジミの平均的な出現率は92%前後になるのではないかと思う。

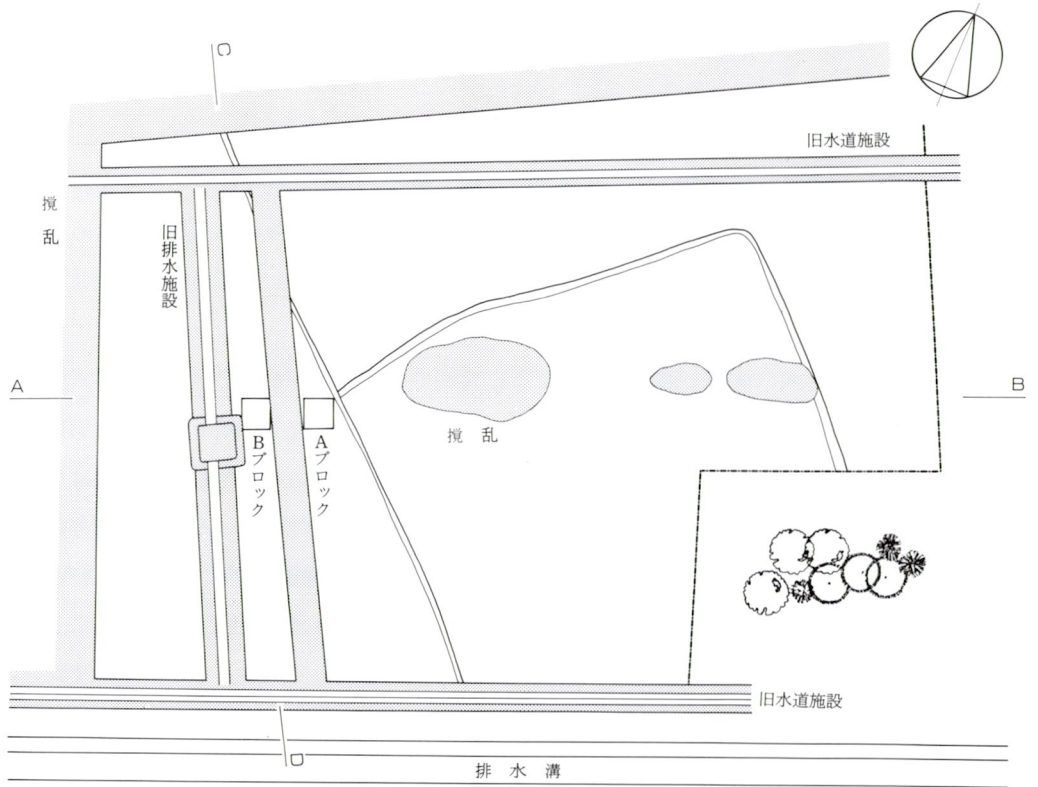
遺物の出土状態 貝層から600片、貝層外の埋没土中から約200片の土器破片、磨製石斧？1個、石鏃2個、自然石29個などが出土した。平面分布図に収録したドットは、主に貝層外の遺物であって、貝層中の遺物含有状態もほぼ同様に理解してよい。大部分の遺物は、第三号住居址とほぼ同様の傾向を示し出土している。土器破片中には若干の接合資料も存在する。

貝層中の動物遺存体についてみると、獣骨片のニホンジカ・イノシシなどは、aとcの層中に含まれていたものが大部分を占めるが、量的には魚骨に比較するとはるかに少ない。魚骨片クロダイ・スズキなどは、c層（ヤマトシジミ）の上面付近一帯に目立ち、出土量も多かった。とくにクロダイは各部位骨（上顎骨・歯骨・鰓蓋骨・角骨・脊椎骨・臀鰭棘など）が多く採集されている。また、貝層から床面上にかけては鹿角、イノシシの下顎骨、釣針、刺突具、鹿角未成品など多くの有意義な遺物が発見された。

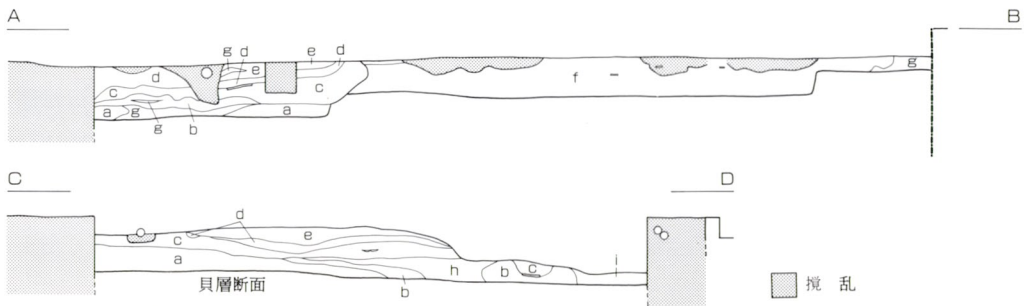
時 期 貝層と貝層外の出土土器は、ほとんど区別できず、花積下層式・関山式に比定され、後者の大型破片が量的に多くなるように見受けられる。



第五图 第三・四号住居址実測図(1)



校舎



- a: ヤマトシジミ b: マガキ c: ヤマトシジミ d: マガキ e: ヤマトシジミ
 f: 褐色土 (ローム粒子を多量に含む) g: 茶褐色土 h: 褐色土
 (ローム・黒褐色を含む) i: 黒色土

第六図 第三・四号住居址実測図(2)

第四章 出土遺物の概要

1 土器

今回の調査で検出された土器は、前期前半の花積下層式・関山式期に比定できる資料で、すべて胎土に植物性繊維を混入している。花積下層式にあたる土器は全体の65%以上を占める。この中に数例の単軸絡条体による東北系の網目状土器が含まれ、その他に若干の黒浜式類似土器、浮島式土器などが混在する。

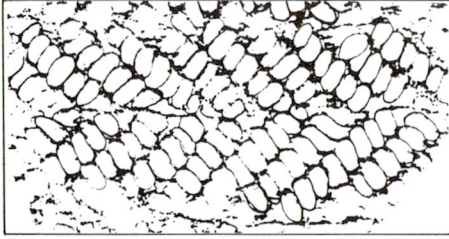
出土した土器の文様の種類・構成は図のように大別できる。1～6までが花積下層式期に該当する。1は原体 $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \cdot L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right. \right.$ 、2は原体 $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \cdot L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right. \right.$ ($R \cdot L$ は3本撚り)による羽状縄文である。この他にも $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \cdot L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right. \right.$ の原体による羽状縄文も出土している。今回の調査では2の縄文が最も多く出土した。3は口縁部に刻目のある隆起帯を4本貼り付けている。4は複合の口縁部に、篋状の工具による沈線文を鋸歯状に施文する。5と6は、口縁部に類似した文様構成をもつ。刻目のある隆起帯で区画した内部には、撚りの異なる2本一組の撚糸圧痕文を蕨手状に上向きと下向きの交互に押捺し、その中心と末端部分に円形竹管文を配している。さらに短い沈線を、5は矢羽状に6は帯状に充填した構成である。

関山式期に該当する土器は7～10である。7は原体 $R \left\{ \begin{matrix} L \\ L \end{matrix} \cdot L \left\{ \begin{matrix} R \\ R \end{matrix} \right. \right.$ でループ文を施した羽状縄文8のようにループ部分のみを施文する縄文も多くみられた。9は平行沈線文の間を同じ工具を用いて鋸歯状に施文しており、関山式の基本的モチーフである。10は小瘤文(貼付文)と刺突列によって構成される文様であるが、複列の場合、花積下層式の撚糸圧痕文を思わせる施文法がみられる例もある。

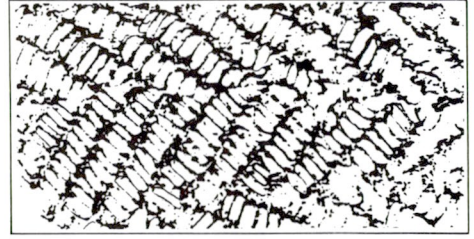
花積下層式土器の器形は、ほとんどが口縁部を僅かに外反させた深鉢形を呈する。口縁部は平縁と波状があり、前者が多い。撚糸圧痕文などによる口縁部文様帯を有するものは、波状口縁の傾向がみられる。波状口縁をもつ土器は、口辺部が外反し、胴部上半ですぼまり、下半で若干膨らみ底部に移行する。底部は上げ底(縄文施文)と平底(無文)があり、上げ底が多く出土している。

関山式土器も、花積下層式の器形に類似し、口縁部が僅かに外反するもの、外反せず直線状に開き、ややふくらむ胴部から底部に移行するものがある。底部は上げ底である。(仁平妙子)

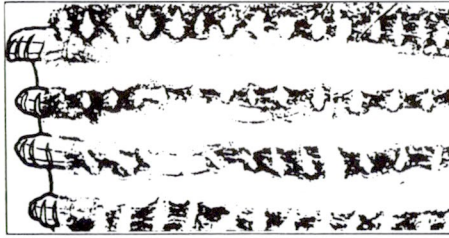
今回出土した花積下層式の特徴は、先学が指摘されたように、本式の中でも新しい段階に属し、関山式にはこれらに続く古い要素がうかがわれる好資料である。



1 羽状縄文



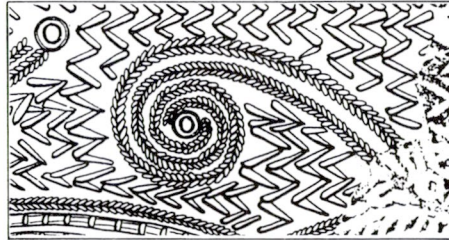
2 羽状縄文



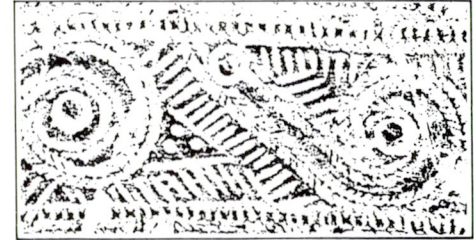
3 刻目付隆起帯文



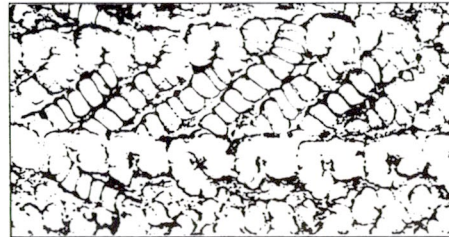
4 沈線文 (鋸齒状文)



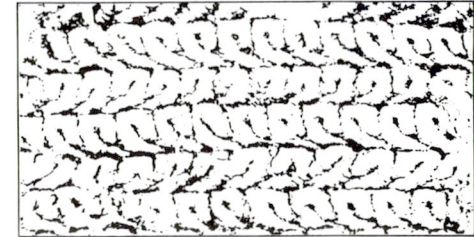
5 蕨手状捺糸圧痕文



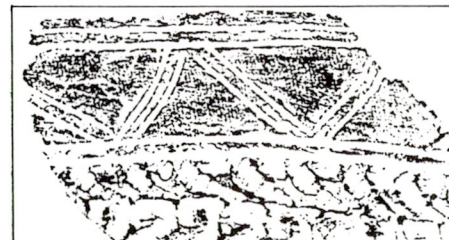
6 蕨手状捺糸圧痕文



7 ループ文



8 ループ文

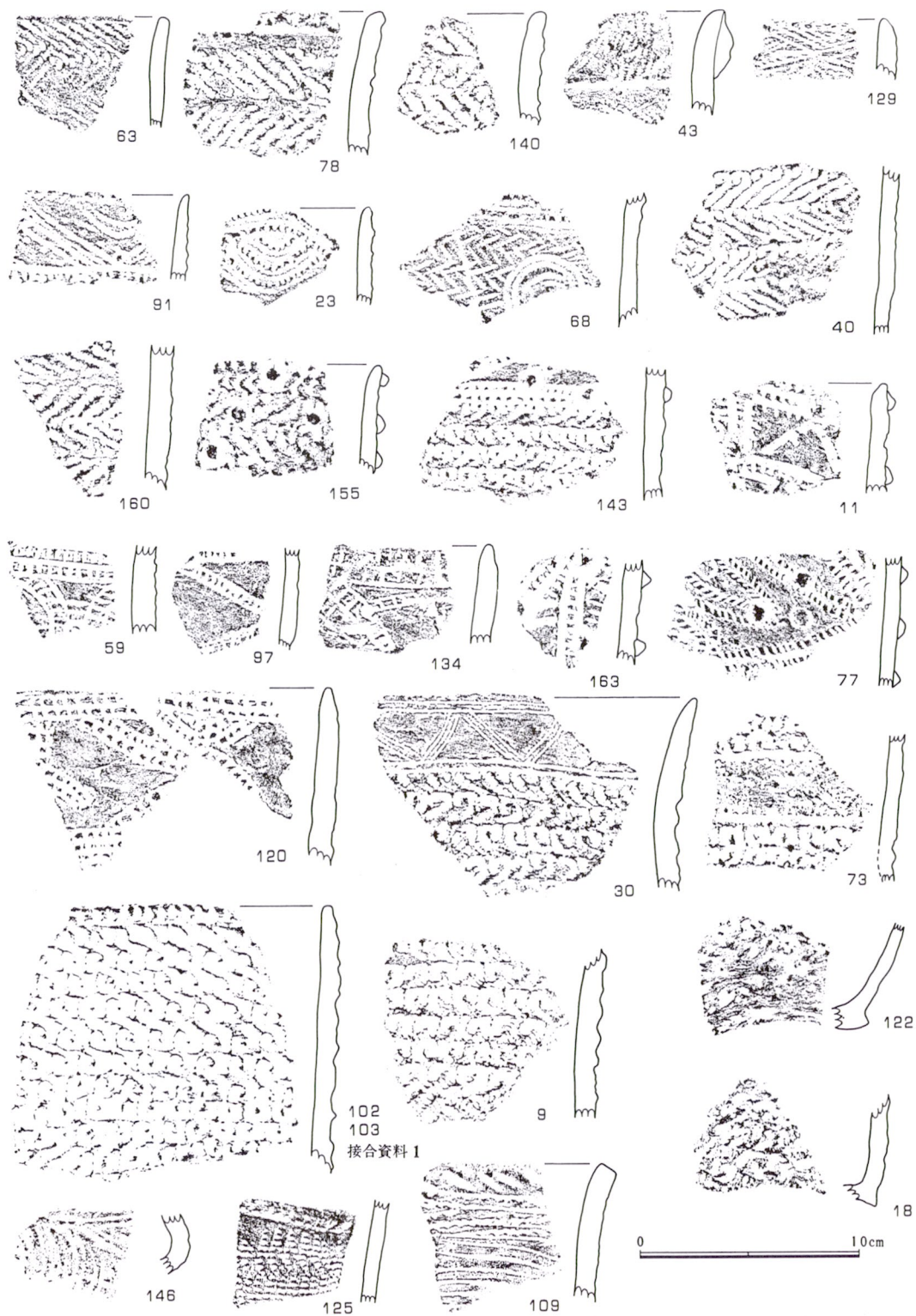


9 平行沈線文 (鋸齒状文)

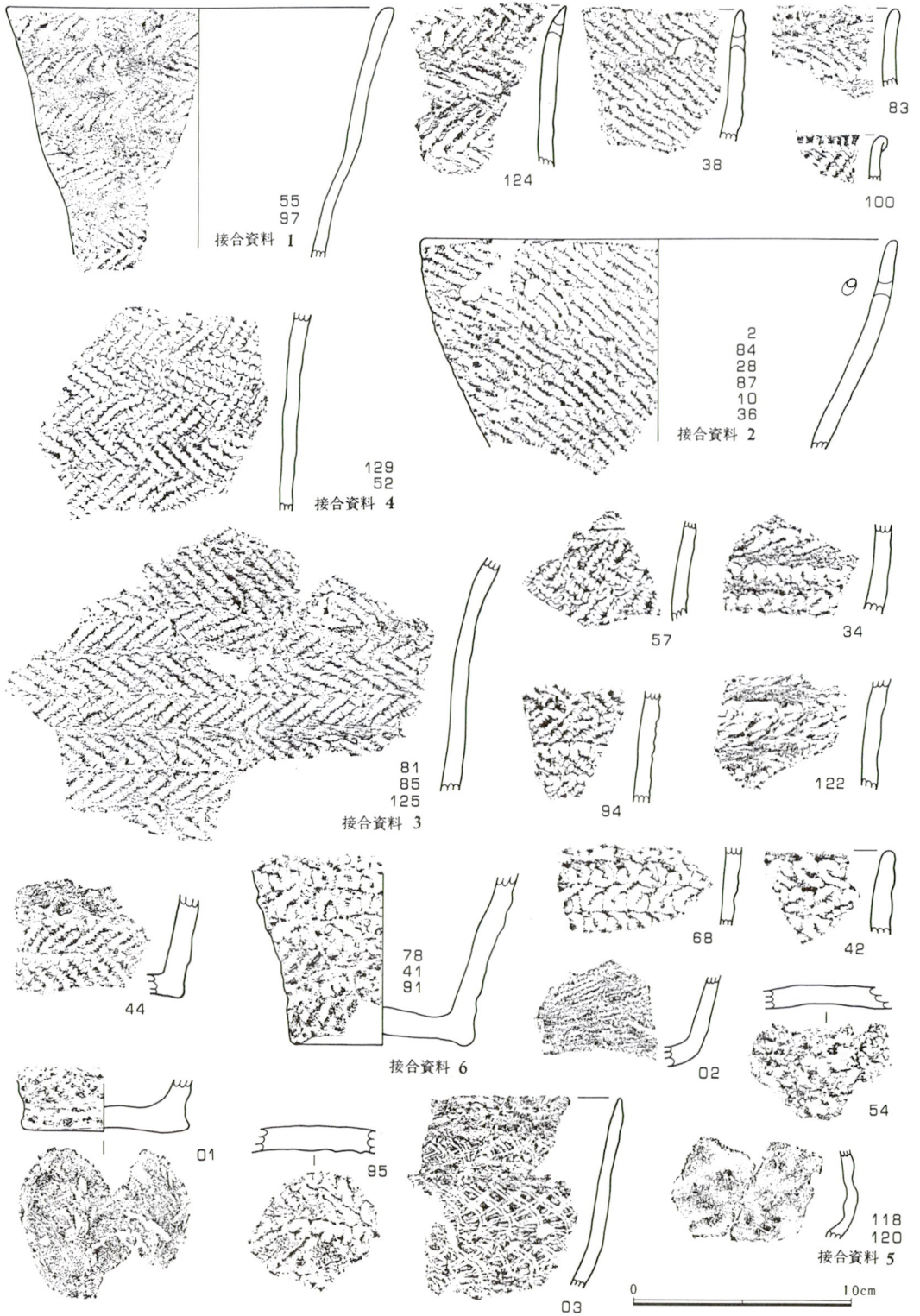


10 小瘤文 (貼付文)

第七図 文様模式図



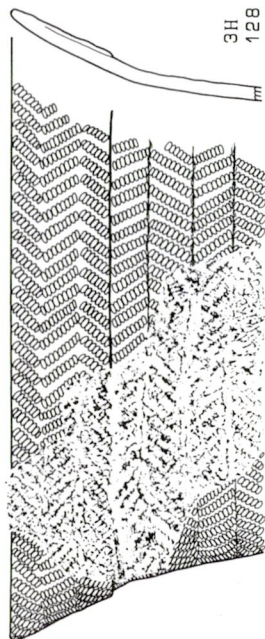
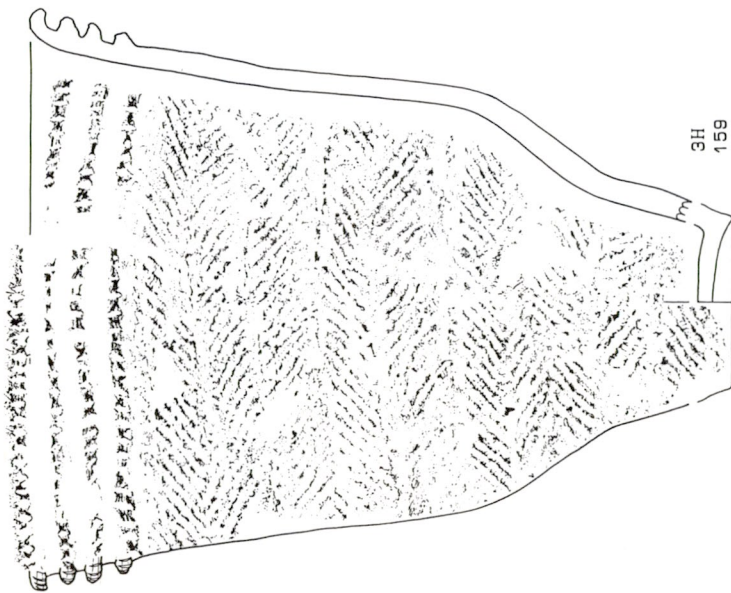
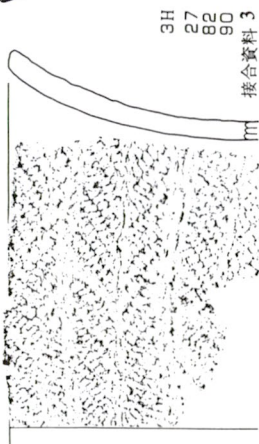
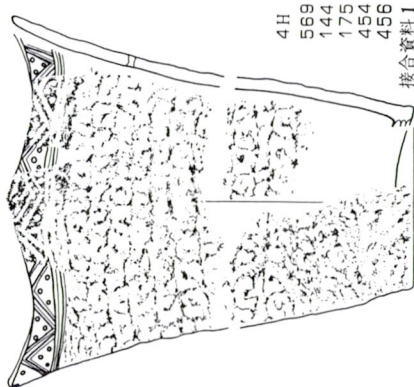
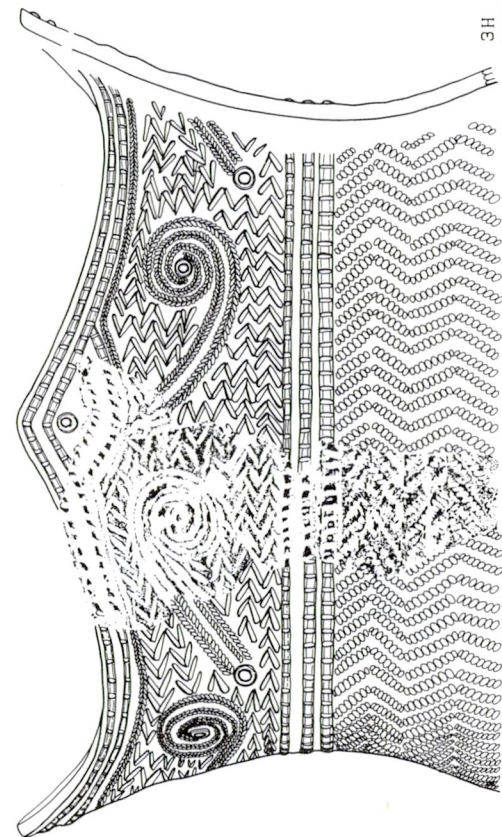
第八图 第一号住居址出土土器实测图



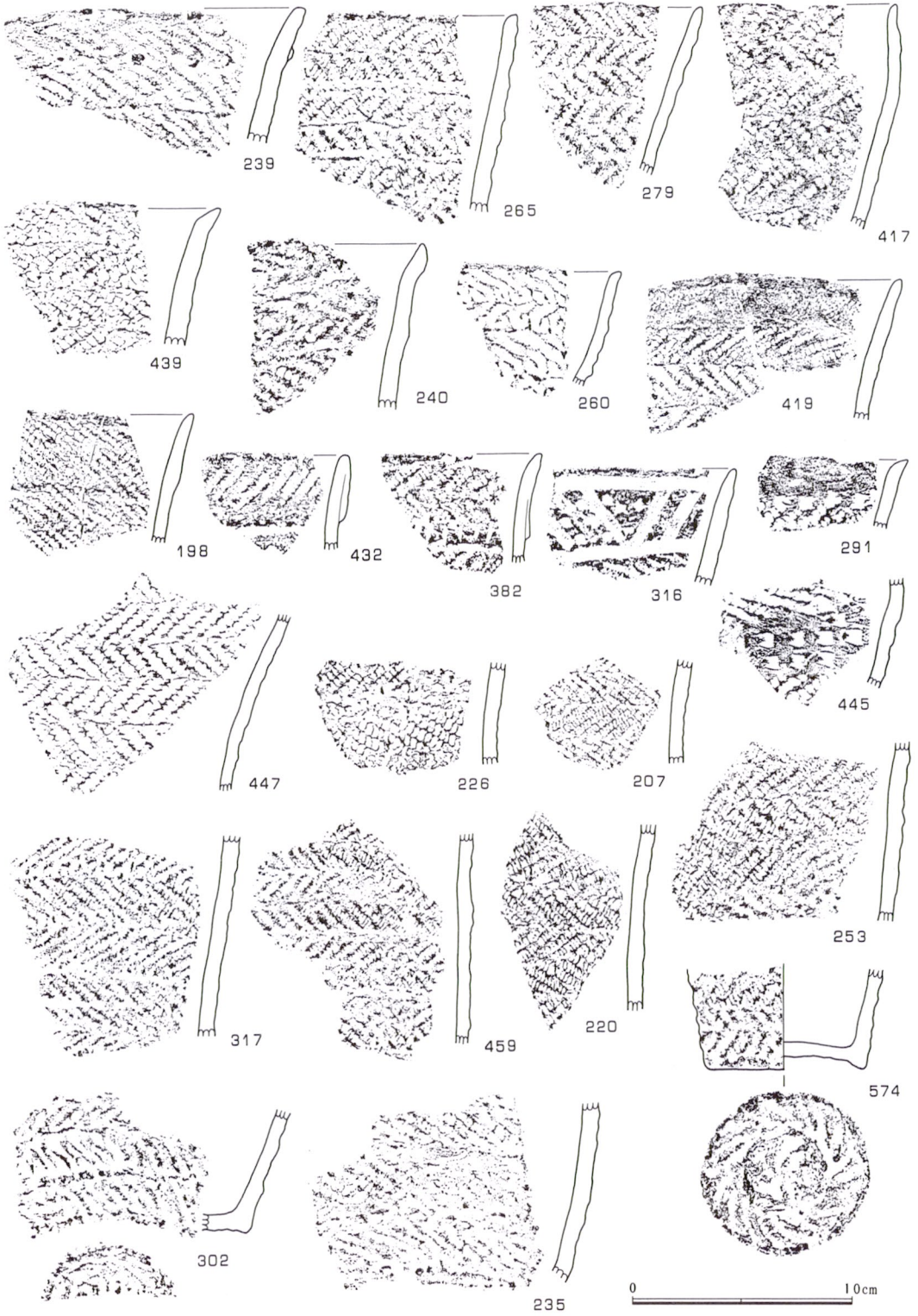
第九图 第二号住居址出土土器实测图



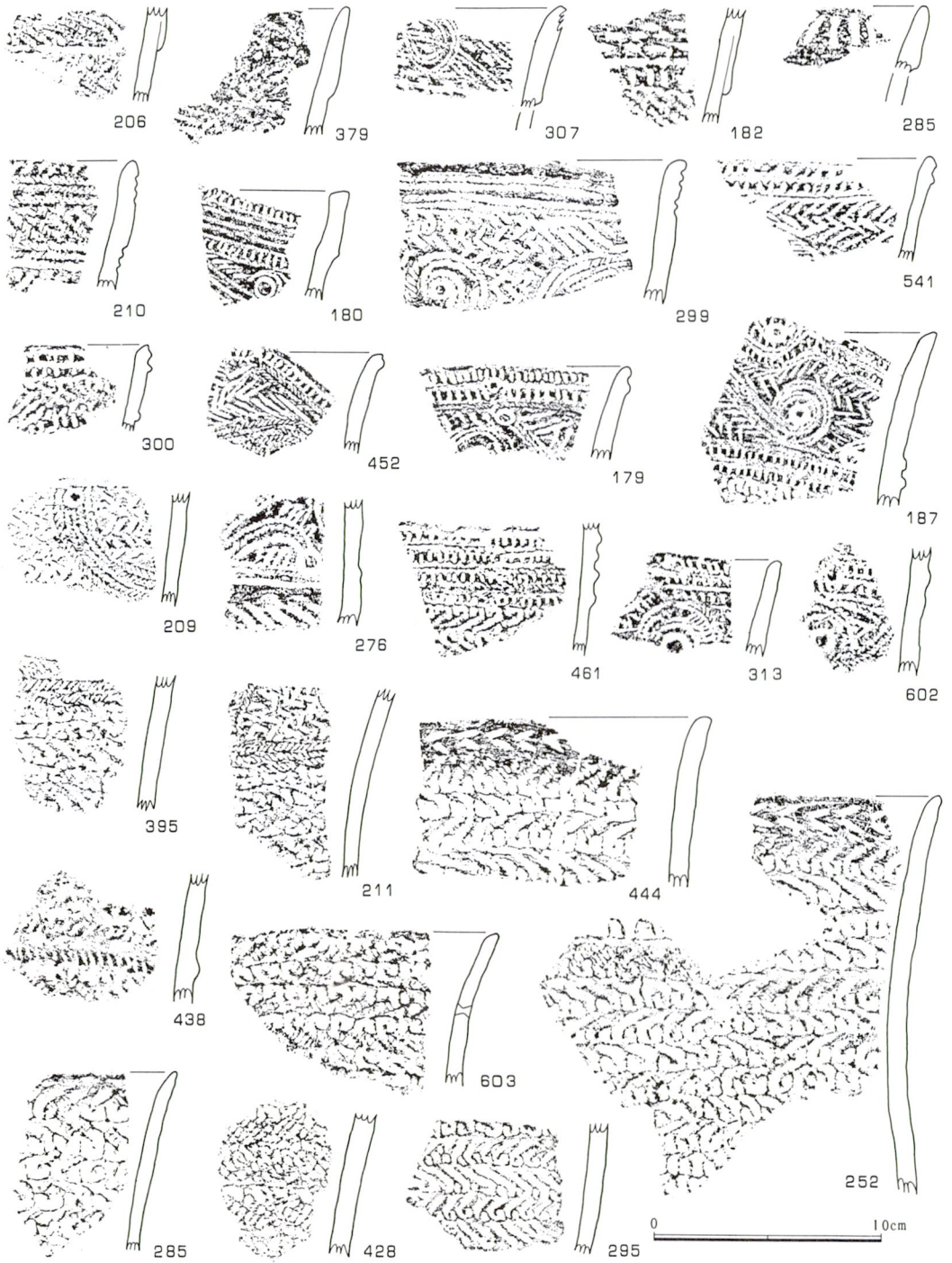
第一〇图 第三号住居址出土土器实测图



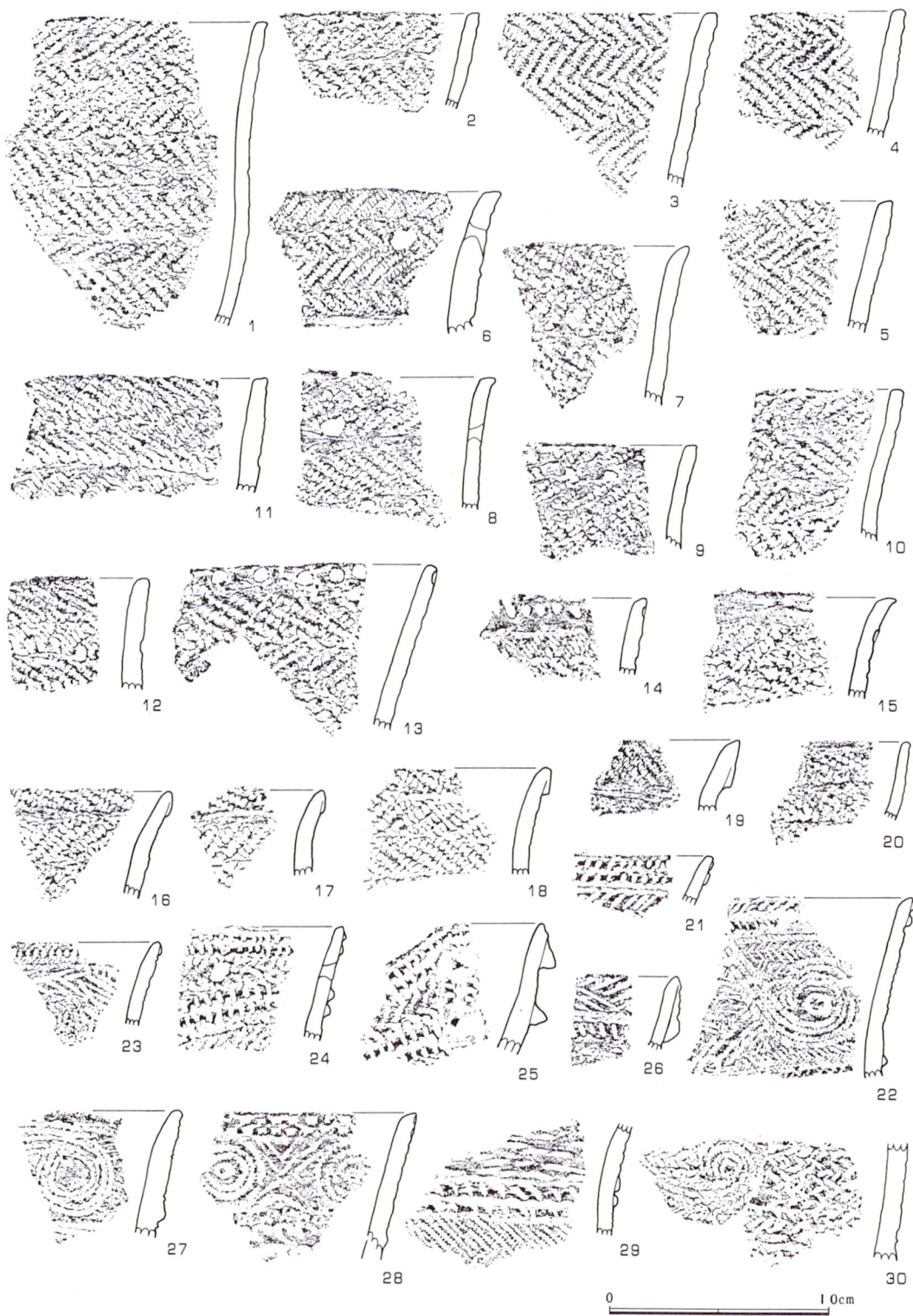
第一一四图 第三·四号住居址出土土器実測图



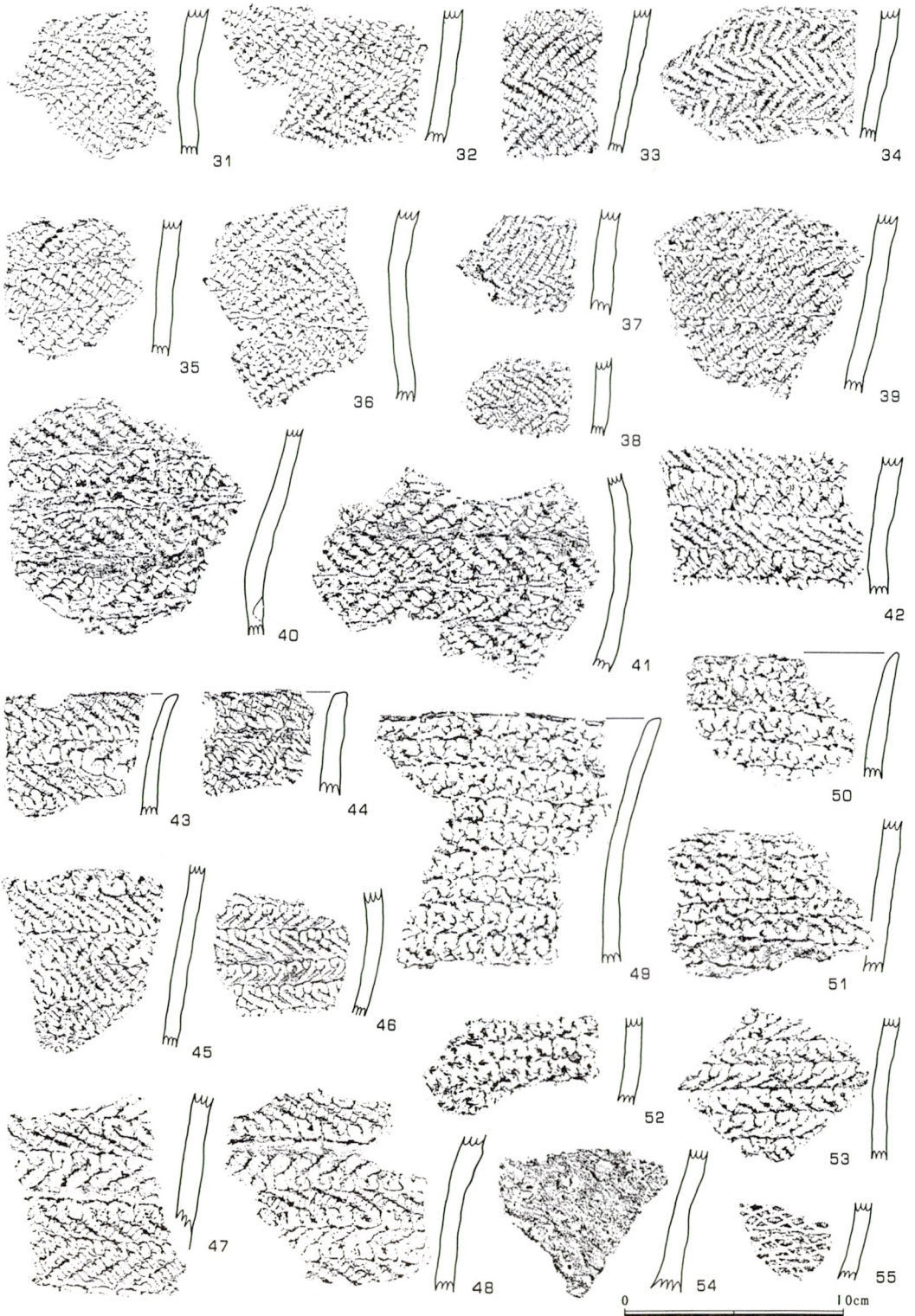
第一二图 第四号住居址出土土器实测图(1)



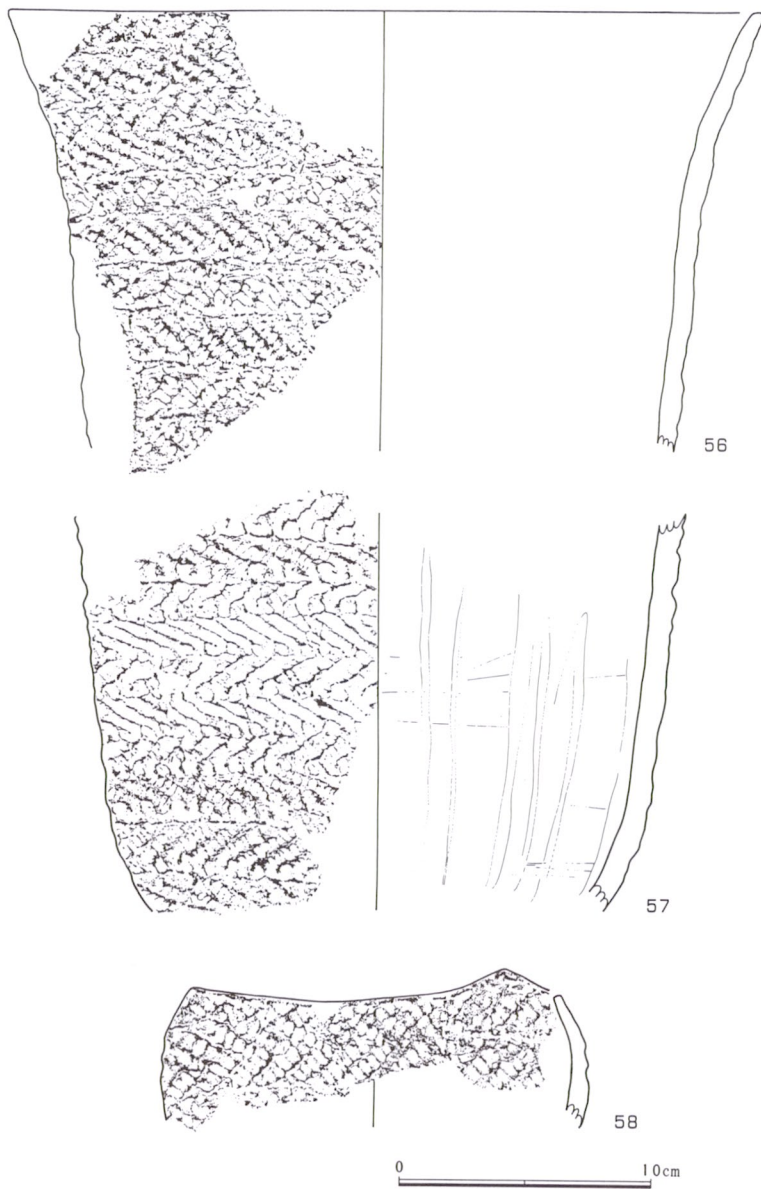
第一三图 第四号住居址出土土器实测图(2)



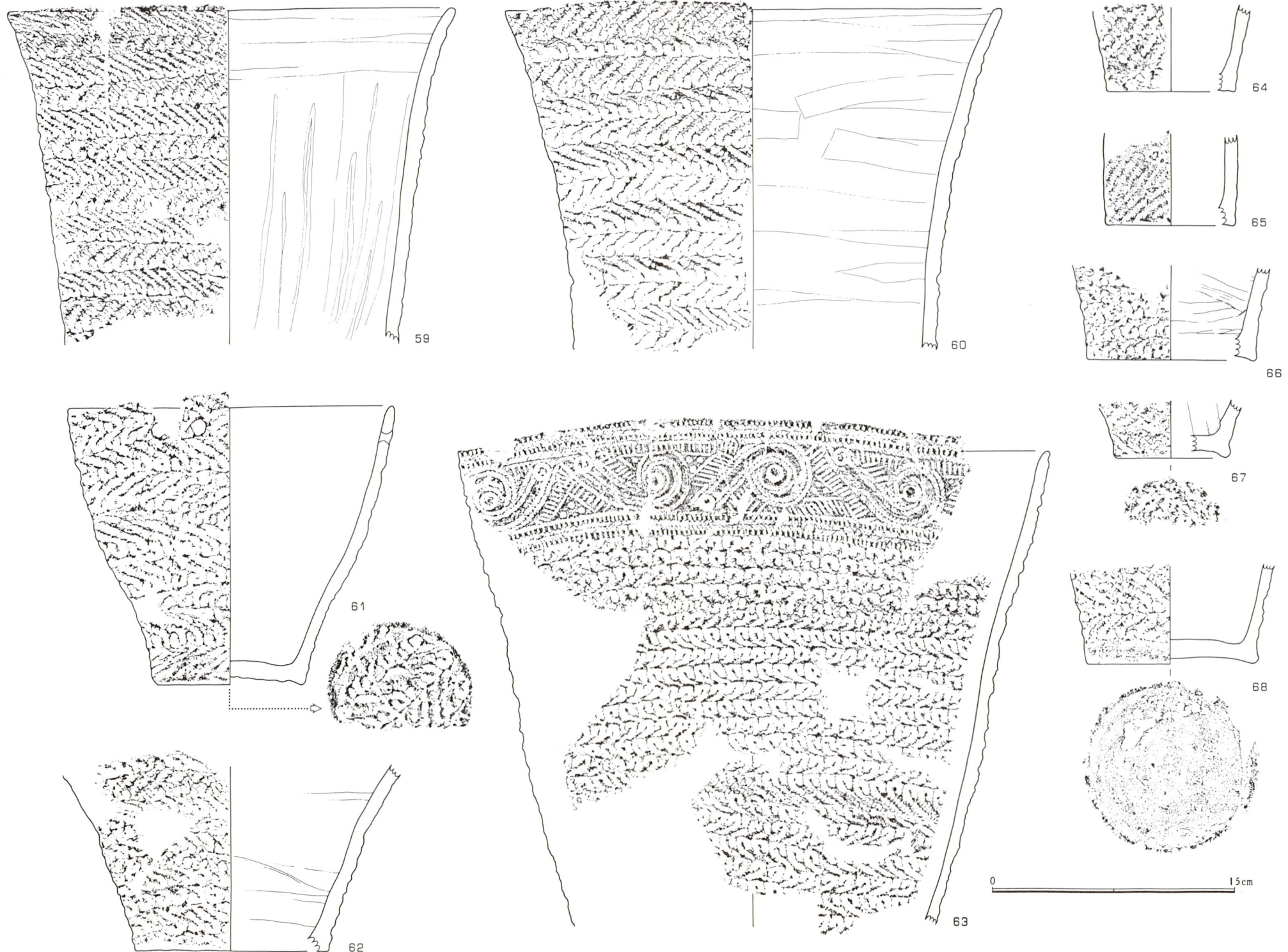
第一四图 第四号住居址貝層出土土器実測图(1)



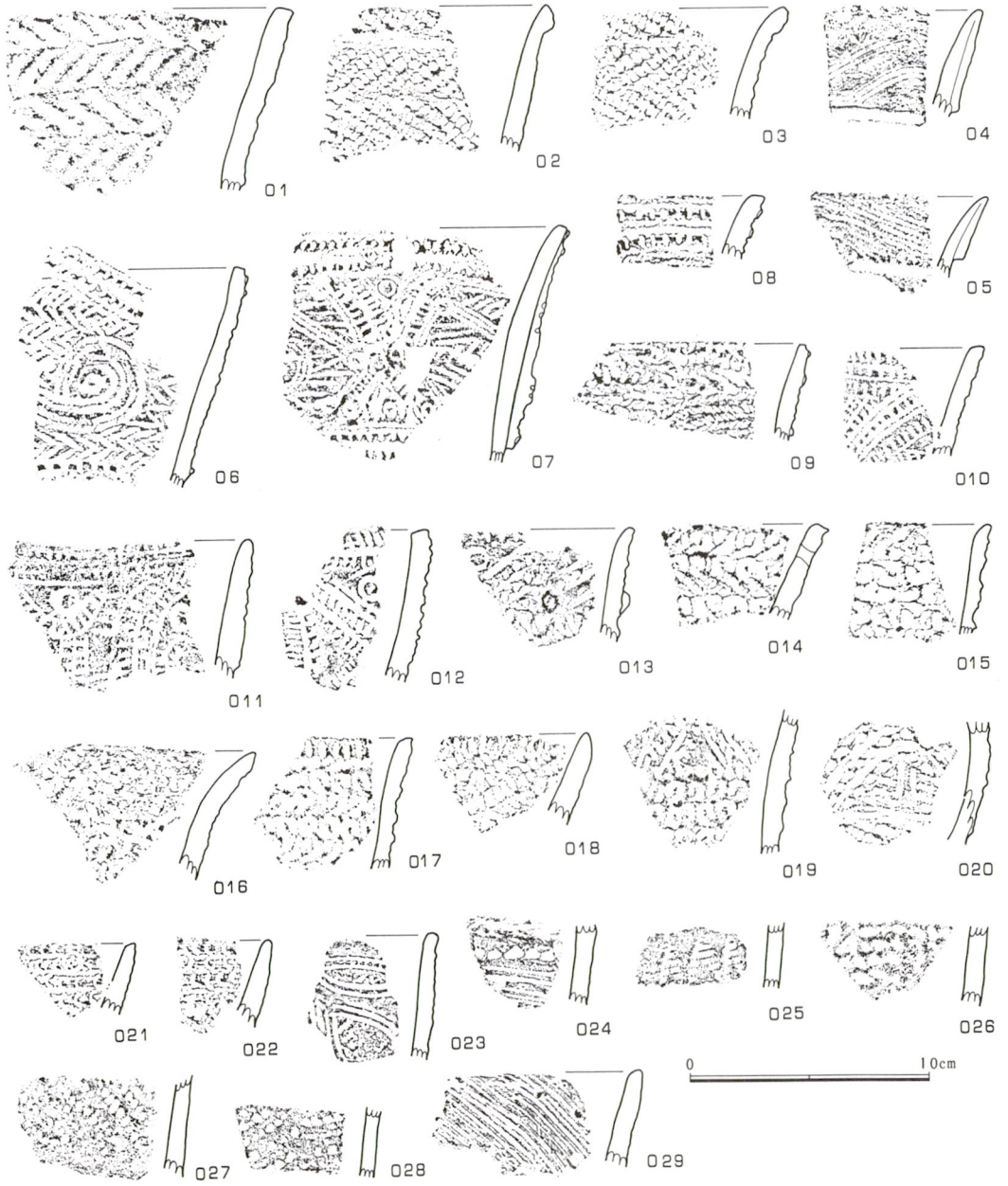
第一五图 第四号住居址具層出土土器実測図(2)



第一六图 第四号住居址貝層出土土器実測図(3)



第一七图 第四号住居址貝層出土土器実測图(4)



第一八図 確認調査出土土器実測図

2 石器 (第一九・二〇図)

各住居址から出土した石器および石製品は、礫器、敲石、凹石、擦石、磨製石斧、軽石、石鏃などの種類である。

礫器 第一・三号住居址から1点出土している。大きき90mm、厚さ25~30mmの自然礫の一端に、片側から打撃を加えて刃部を作出したものである。164は緑泥片岩、重量400g、78は細粒砂岩、190gを測る。

敲石 第三号住居址から1点118が発見された。太さ30~35mmの細長い自然石で、一端を欠損している。上端部に敲打痕を残す。砂岩。190g。

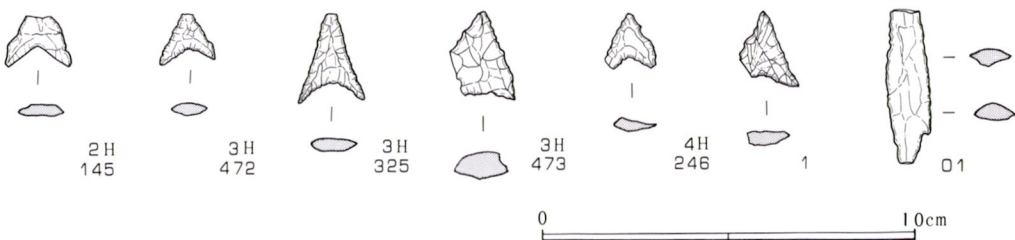
凹石 扁平な自然礫(略円形・長楕円形)の片面または両面に打痕を有し、僅かにくぼみがある。第一号住居址から1例115、第三号住居址から3例111・488・01(確認面)が出土した。大ききは85~100mm、厚さ40~50mmの礫で、重量は第三号住居址の完形または完形品に近い3例を計測すると、640g、600g、770gである。砂岩。

擦石 第三号住居址の135が該当する。楕円形状礫の側縁(b面)に幅15mmの擦痕・打痕が一周して明瞭に残る。重量890g。砂岩。

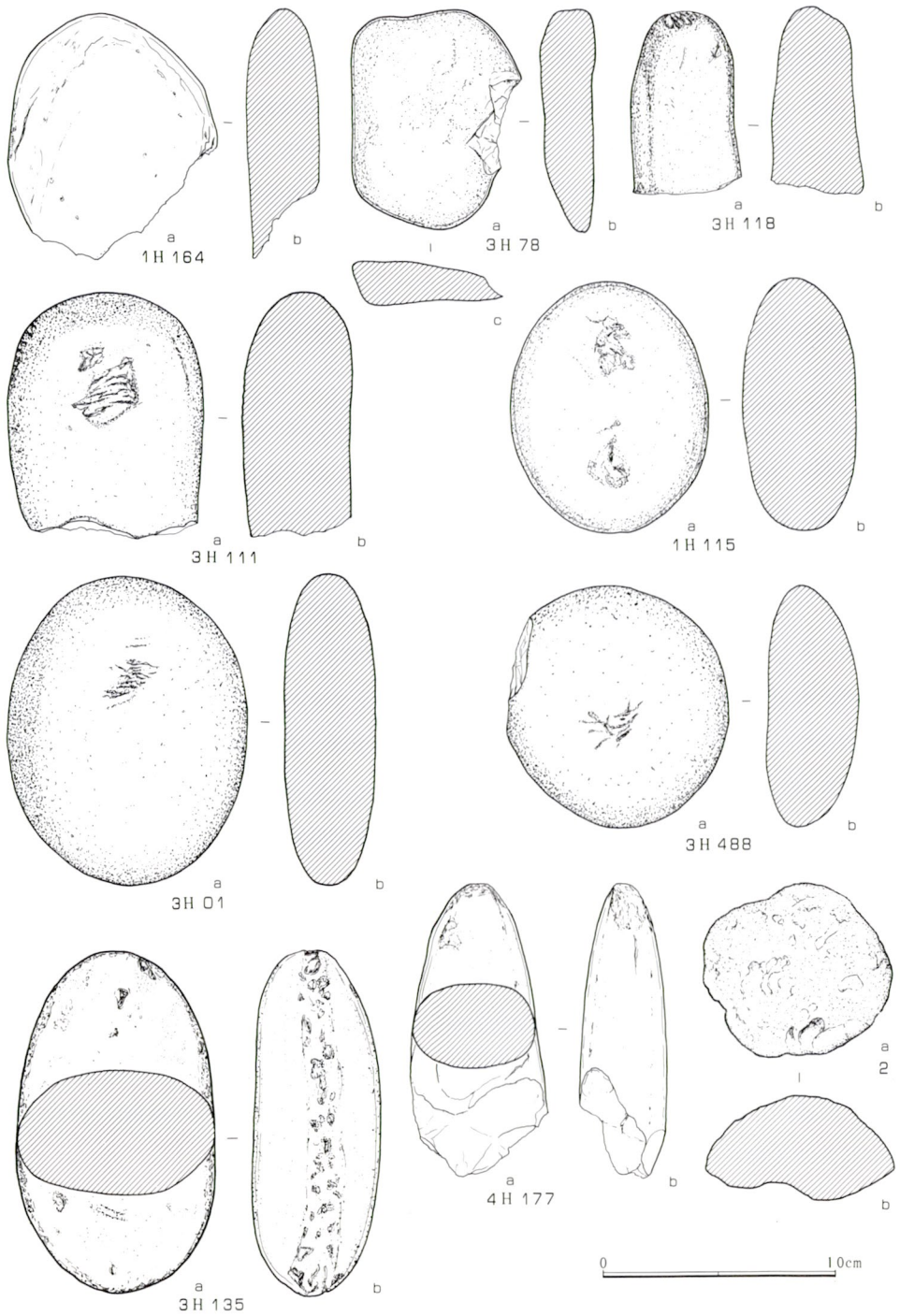
磨製石斧 第四号住居址出土。177は両刃のよく研磨された石斧で、刃部は一部を残し、胴部にかけて大きく欠失する。頭部にも僅かな打痕がみられる。現存長126mm、最大幅55mm、厚さ37mm、重量340g。片麻岩。

軽石 第四号住居址貝層中出土。長径80mm・短径73mm・厚さ40mmの大ききを有する。ほぼ全面に使用による擦痕が認められる。重量65g。

石鏃 第二号住居址2点、第三号住居址3点、第四号住居址2点、同未成品1点と他に表採資料1点がある。住居址出土のものは、すべて無茎の基部が内湾する凹基式に属し、側縁は直線状に近い三角形を呈するものと、側縁が幾分かぼみながらのびる長三角形鏃3H325がみられる。完形品は少なく先端部や基部の一端を欠失したものが多し。大ききは全長15mm(4H246)、23mm(3H473)、現存長24mm(3H325)などがある。石質はチャート・メノウなどを使っている。01は有茎長身で先端部と基部の一端を僅かに欠損する。現存長40mm、最大幅11mm。頁岩。表採資料。



第一九図 住居址出土・表採石器実測図(1)



第二〇図 住居址出土石器実測図(2)

3 骨角器 (第二一図, 図版第九・一〇)

鹿角製の釣針5点と刺突具(鏃・針・ヤス?)7点が発見されている。

釣針 1は現存長79mmを測る大型品である。軸部と湾曲部の一部を残す。軸部は外側に弱く外反し、頭部に2本の浅い削り込みが一周する。軸径は上方で6mmを測るが、湾曲部へ移行するにしたがい太くなる。軸部下半に鹿角の自然面が残り、湾曲部は僅かにねじれている。分岐部に加工した製品である。2は現存長62mm、湾曲部の大部分と鉤部を欠く。前者にくらべて幾分小さくなるが、素材と製作技法はほとんど変わらないように思われる。3は現存長62mmである。軸径は前二者にくらべ少し細くなり、弱く外反する外側に自然面が残る。これも分岐部から製作したものであろう。4は現存長40mmで、軸部下半を欠損している。製作技法は前者に近似する。5は湾曲部の破片で割れ口が新しい。発掘中に割れたもので両端の破片がみつからない。

刺突具 1は平滑に研磨した反対側に海綿質が残る。ほとんど完形品に近い。現存長50mm、最大幅8mm。鹿角製。2は下半部を折損し、研磨面の一部に鹿角の自然面がみられる。現存長27mm、最大幅7mm。3は下半部欠損、上端部を入念に研磨し尖らせている。現存長40mm、最大幅7mm。鹿骨製。4・5は縦割した鹿骨に研磨を施している。最大幅4~5mmの細身に作出し、一端を欠損する。形状からみて骨針として製作したものと思われる。6は鹿角幹部を縦割した長さ65mmの破片で、外面は多少研磨し、内面の海綿質は割られたままの状態である。図の上端(幅広い部分)に研磨を加え尖らせている。刺突具未成品というよりは、別の用途に供したものであろう。7は角幹部を長さ57mmの大きさに縦割したもので、表面の自然面を多少研磨し、内面に海綿質が僅かに残る。これはさらに細く割り研磨加工すると立派な刺突具になろう。

4 貝製品 (第二二図)

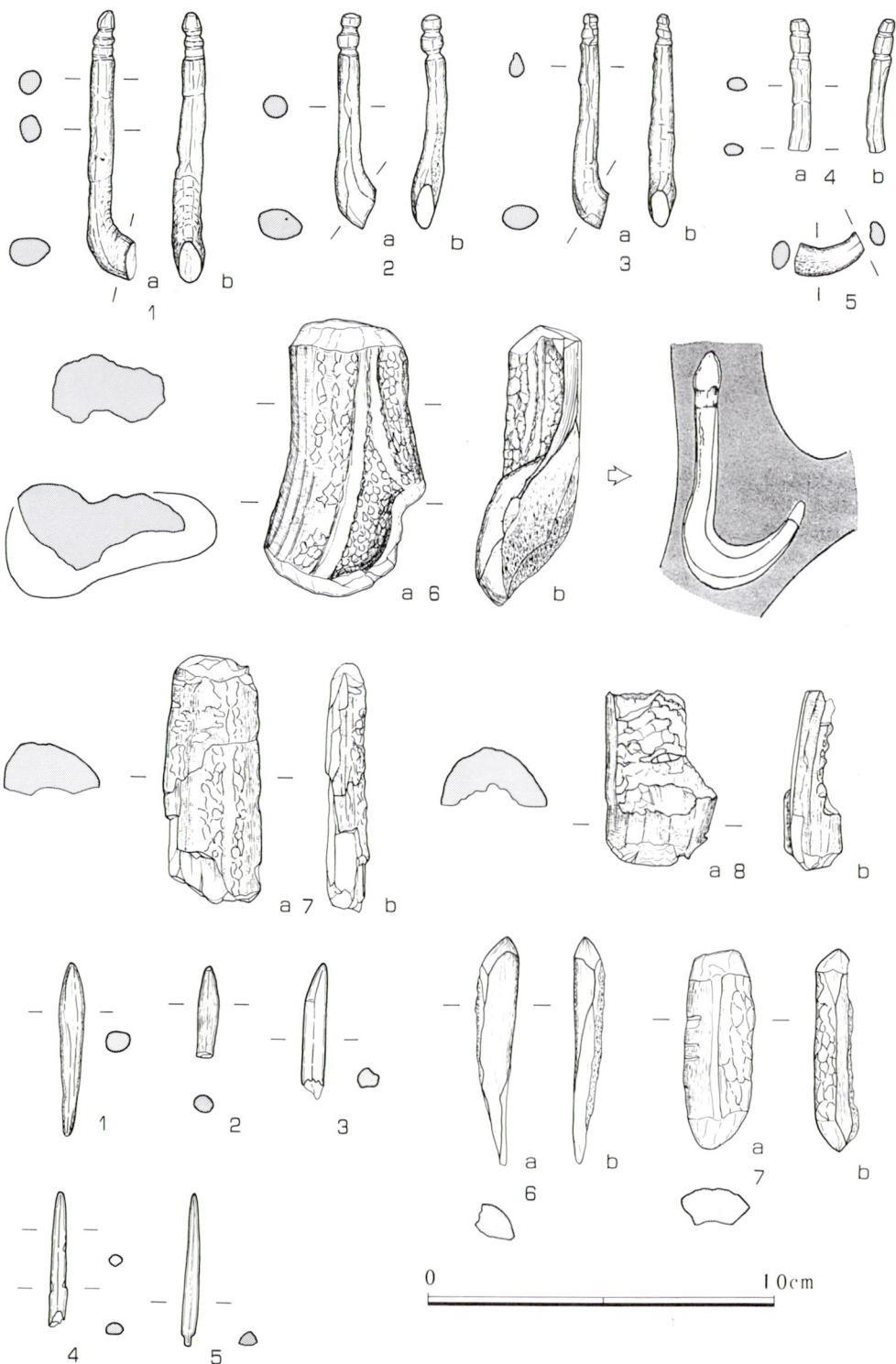
ハマグリ(ハマグリの腹縁)に剝離を施して刃をつけた刃器である。破損品を含めた数は13点になる。このうち11点を図示した。大きさは殻長70~80mmの標本が多い。

同心円脈のあるエナメル質部分の外側面を一次的に剝離し、内側の面に二次押圧加工を施している。腹縁の一部のみを加工した1、ほぼ全体に加工を施す2のような種類に分けられる。大部分の貝刃は後者の工程により加工したようである。

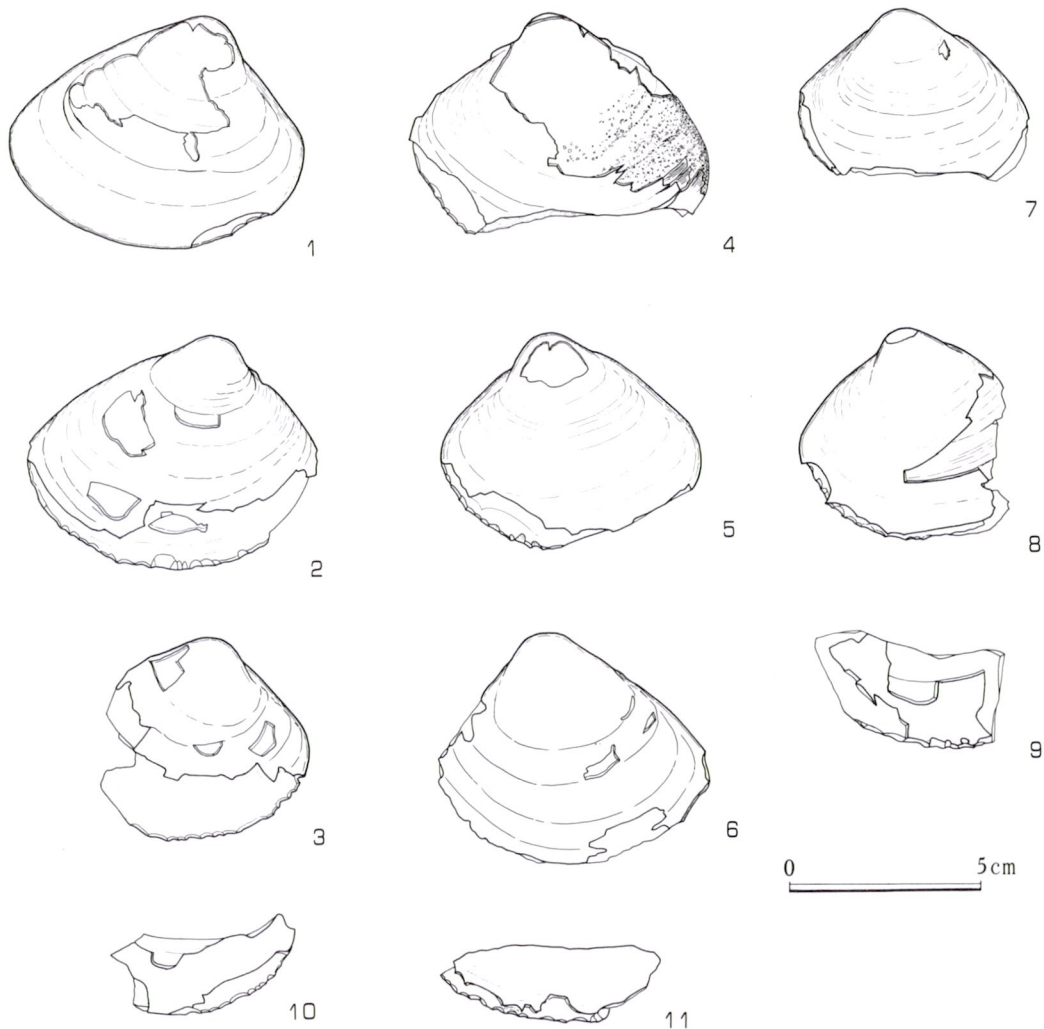
5 未成品・加工痕のある鹿角 (第二一・二三図, 図版第九・一〇)

釣針未成品は3点、刺突具未成品および加工痕のある鹿角も約6点ほど出土している。

釣針未成品 未成品3例は釣針である。6は鹿角の分岐部を80mmの長さに切断し、擦り切り溝を入れ二つに縦割した好例で、模式図(金子浩昌氏原図参照)のように釣針が製作されたものであろう。7は角幹を直接縦割し、扁平な板状にしたもので、長さ70mm、幅30mmの大きさを有する。



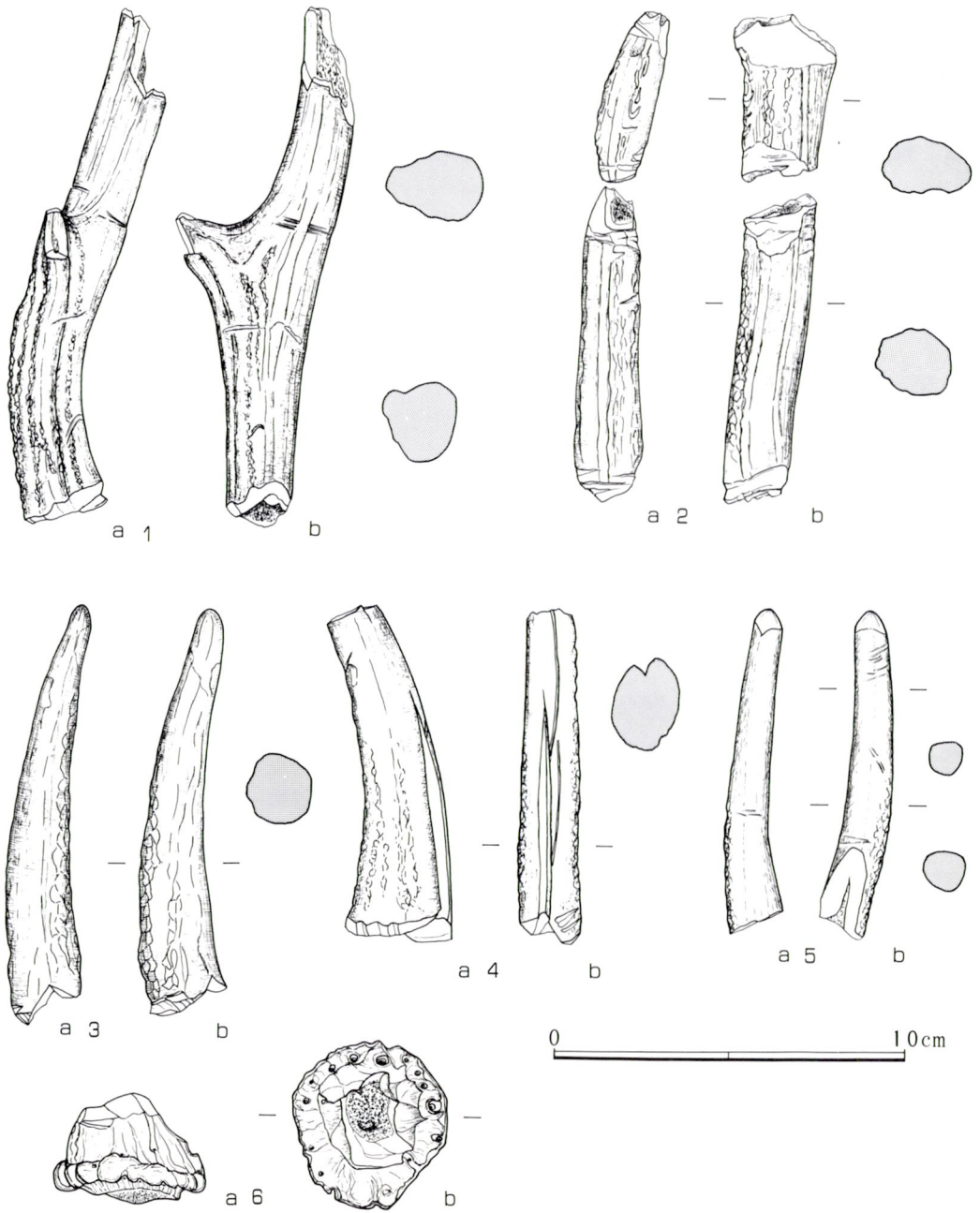
第二一圖 第四号住居址貝層出土骨角器・未成品実測図



第二二図 第四号住居址貝層出土具製品実測図

8は中心部を削りぬく荒削りの工程で破損した資料と思われる。

加工痕のある鹿角 角幹軸線と直角に擦り切り手法による横截痕が半周する1，削り込み手法によってV字状の浅い溝をつけて割った1～3，縦割用のV字状擦り切り溝をつけた4，このほかに角冠先端を丸めた5がある。これらの鹿角には，製品を作るために削り落された廃品も含まれる。6は角座のとれた落角であり，その好例の一つと思われる。第I枝叉状部上方の角幹を利用するために，叉状部の下端（角座直上）から削りとった残りの部分である。角幹の周囲から約10mmほど粗い削り込みを入れ，海綿質のところでは折りとっている。



第二三図 第四号住居址貝層出土加工痕のある鹿角実測図

第 五 章 動物遺存体の概要

1 貝 類 第四号住居址内の貝層から検出された種類は、腹足綱 7 種、斧足綱 4 種である。

A 腹足綱（巻貝類）

- 1 クロアワビ
- 2 サザエ
- 3 オオタニシ
- 4 ヘナタリ
- 5 ウミニナ
- 6 アカニシ
- 7 ツメタガイ

B 斧足綱（二枚貝類）

- 1 マガキ
- 2 ヤマトシジミ
- 3 ウネナシトマヤガイ
- 4 ハマグリ

A 腹足綱

クロアワビ 湾口部の海水の影響を受ける岩礁域に棲息する貝である。殻内面の光沢を帯びた破片が若干出土している。

サザエ 潮間帯下の岩礁に棲む。合計12個の蓋が検出された。大きさは最小20×19mm、最大48×48mmまであり、45×41mm程度のもが多い。

オオタニシ 淡水産の貝種で湖沼が棲息地である。殻長付近欠損、殻径25mmの大きさの個体が発見されている。

ヘナタリ 潮間帯の砂泥底に棲む種類である。殻高約25mm、殻径9mmの標本が数個出土している。

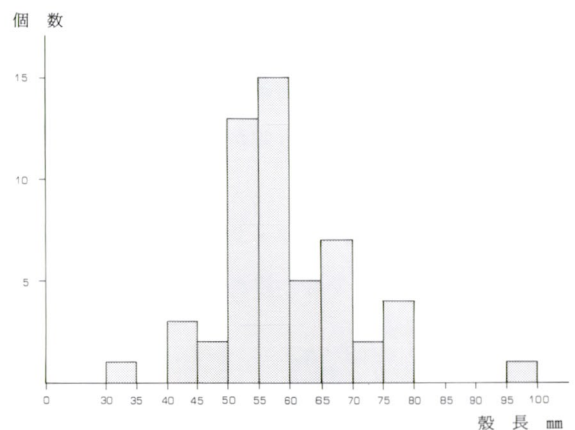
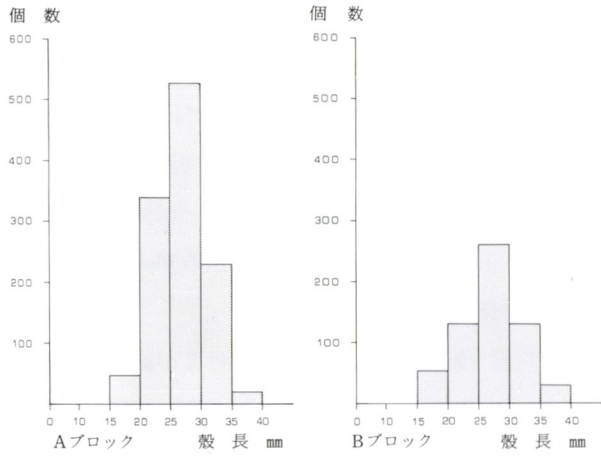
ウミニナ 潮間帯の小石・砂底にみられる貝で、殻高は約25mmの大きさである。

アカニシ 潮間帯よりやや深い砂泥底に棲む貝である。殻頂と殻口を欠く。殻径約95mmの個体が1個発見された。

ツメタガイ 潮間帯下の砂泥から採集した貝である。標本は僅かに1個で、殻口付近を欠損する。

B 斧足綱

マガキ 河口付近の比較的塩分の低い岩礁に付着する。ヤマトシジミについて多く出土した貝である。貝層中からの出土状態は、すでにのべたように、個体として出土する例は少なく、厚さ5～10cmの層をなして存在する傾向がみられた。大きさは殻高50～65mmほどに成長したものが多く、



第二四図 ヤマトシジミ(上)・ハマグリ(下)殻長分布図

ヤマトシジミ 貝層の主体となる種類で、海水が流入する河口・潟などの砂泥底に棲む汽水産の貝である。地点別サンプリングの殻長出現率は別図に示したとおりであって、両地点とも26~30mmの大きさが42~46%を占め、21~25mmのものが22~28%、31~35mmの大型貝が21%前後の比率で近似する。最小殻長は11mm、最大殻長は42mmまで計測できた。茨城町権現峯貝塚(関山式期)の殻長ピークは20~25mmであるから、やや大型の貝が多いように思われる。

ウネナシトマヤガイ 内湾奥の潮間帯の岩礁に付着する小型の貝である。標本はすべてB地点のブロック内から検出されている。殻長19~25mm程度の大きさのものがみられる。

ハマグリ 内湾の潮間帯や浅海の砂泥地に産する。地点サンプルからの出土は4個であるが、総数で99個を検出した。計測可能な標本53個(貝刃11個を含む)、破損して計測不可能なもの46個である。殻長は29~98mmの範囲内に分布する。殻長50~60mmの中型貝がピークで約54%を占め、それより大型のものが36%前後検出され、全体としてみれば中・大型の貝が多いように思われる。

2 魚 類

クロダイ 近海や内湾の水深5m以上の砂泥底に棲み、とくに幼魚は河口付近で育つ。初夏から秋頃にかけて多く釣ることができる。魚骨のなかでは出土量が最も多い。主上顎骨(左13・右14), 前上顎骨(左51・右39), 歯骨(左23・右26), 前鰓蓋骨(右3), 角骨(左3・右7), 椎骨(134), 神経・血管間棘(54), 臀鰭棘(215)などが採集されている。前上顎骨長は最大40mm, 最小15mmの範囲内に出現し, 20mm前後のものから30mm以上の大きさが多くみられる。体長はおそらく30~40cmに成長したものであろう。

スズキ 内湾の河口付近に棲息し, 春から秋にかけてが漁期である。骨の出土量はクロダイに比較すると減少する。この魚は釣り上げる際にエラ洗いを行ない, 針をはずして逃げてしまう習性がある。湾内水域の漁撈活動にもなんらかの影響を及ぼしているかも知れない。前上顎骨(3), 歯骨(左18・右8), 前鰓蓋骨(左6・右7), 主鰓蓋骨(左30・右22)などが出土している。歯骨中には長さが小さいもので35mm前後, 大きいもので65mmに達するものがある。長さ50~65mmのものが多い。体長は25cm前後のものから50~70cmに成長した大型魚を捕獲していたものと思われる。

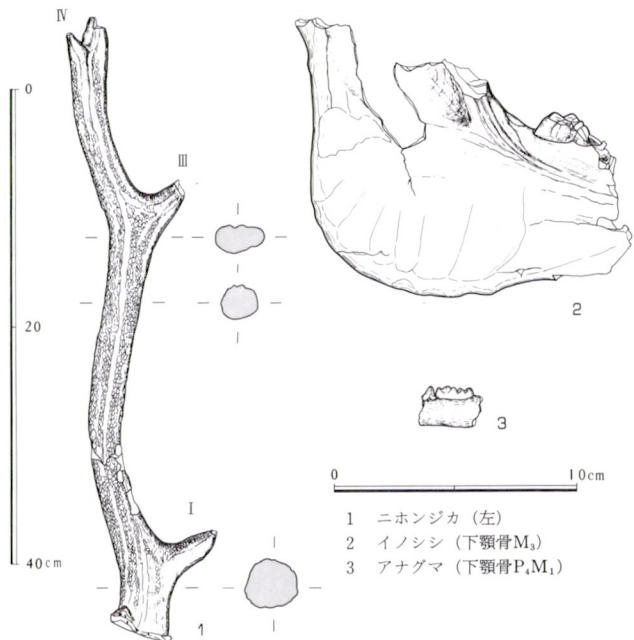
この他に種名が判名した魚骨としては, ボラ・コショウダイ属の一種・マダイ・マアジ・カサゴ科の一種・ヒラメなどが, 量的には少ないけれども出土している(金子氏原稿参照)。

3 獣 類

ニホンジカ(多い)とイノシシ(少ない)の他にイタチ科のアナグマの下顎骨がある。アナグマの出土は珍しく, 現在この付近ではみられない哺乳類である。

4 鳥 類

骨片の中からヒシクイ類・ガン類・ワシ類・オオバン?などの各部位が検出されている。詳細は金子氏の報文を参照されたい。



第二五図 第四号住居址貝層出土動物遺存体実測図

第 六 章 ま と め

奈良時代の昔から注目され『常陸国風土記』那賀郡の条に登場する大串貝塚は、昭和11年(1936)に田沢金吾・大場磐雄・池上啓介・宮崎 糺らによって、初めての学術調査が実施された。学生のころ発掘者のひとり大場磐雄博士から、たわむれに「あの貝塚は貧乏貝塚だよ。掘っても貝ばかりでなにも出てこない。」といわれたことを思い出す。まさにそのとおりであって、国指定史跡のC地点の斜面貝層は、土器破片や魚骨などを採集するだけでも大変苦労した経験がある。土器を除く生活用具、たとえば骨角器類の発見などは夢物語であった。

ところが、昭和60年(1985)になると、川崎純徳氏らを中心としたB1地点の発掘によって、保存状態の非常に良好な貝層とシカの骨角に加工した刺突具と釣針(未成品も含む)が出土した。この調査で発見した骨角器類は、従来私たちにとって手にすることがなかった新資料で、質・量ともにすぐれた内容である。

今回の常澄中学校改築に伴う調査においては、台地上に住居址4軒が発見され、そのうちの1軒(第四号住居址)に貝層が存在し、土器をはじめ石器、貝器、釣針、刺突具類、同未成品などの人工遺物、動物遺存体などが多量に出土し、前回は大きく上回る成果を収める幸運に恵まれたのである。

最初の学術調査が行われてから、実に60年を経過してようやく住居址が発見されるに至った。住居址の発見は、この台地上の空間が大串貝塚人たちの居住域に選ばれていたことを意味する。その規模解明は不可能になったとはいえ、貝塚の大きさからみて、かなりの集落を形成していた事実が想定できるかと思う。

住居址から出土した土器をみると、前期前半の花積下層式・関山式期に比定しうる資料で、豊富な形式的内容を有するものである。土器の中には両者の特徴的文様が、胴部の上下に同居した移行的色彩の強い資料もみられて興味深い。また、本地域の土器のなかに、前期にかぎった事象ではないけれども、東北系の網目状文土器も客体的に含まれている。土器破片は4住居址の出土数を合わせると極めて多い。その分類と説明には多くの紙数が必要となる。

石器は、自然礫の一端に打欠痕、平坦面や側面に敲打痕を残す礫器、敲石、石斧(欠損品)などの種類が若干出土している。この他に狩猟具の石鏃6点が存在する。これまでに30点前後の表採石鏃があるので、本台地での狩猟活動は活発に行われていたように窺われる。

貝器は、比較的大型のハマグリを素材としたもので、腹縁に細かい打欠を加え刃部を作出している。前回の調査資料(昭和60年)について多く発見された遺物である。石器とはまた別の用途に機能する便利な利器であろう。

骨角器は、鹿角製の大型釣針と刺突具類、未成品などが出土した。釣針の4～5点という数に

加えて、製作工程を示す未成品までも発見でき、縄文時代の骨角器、とくに釣針研究にとって、その資料的価値は極めて大きいものがある。内湾沿岸性のクロダイ・スズキの遺存骨の多さからみると、こうした釣針は私たちの予想を越えた数量が製作されていたものと考えてよい。また、刺突具類は、釣針にくらべると素材の骨角部位は多くなり、その加工法も一層工程的に簡略であるから、さらに多くの量が作られたものであろう。

哺乳類の遺存骨は、シカとイノシシを主体とし、他にアナグマがあり、骨片の量はいずれも少なかった。とくにシカの場合は、大串貝塚人にとって重要な食料資源であるばかりでなく、またその骨角が各種骨角製品を作出する素材として欠くことのできないものであった。

一方、魚貝類の採捕活動のうち、貝類については、第四号住居址の貝層の項で、すでに述べたように、貝層ブロック分析の結果を総合すると、ヤマトシジミが大略92%、マガキが5%という出現率を示している。貝塚の周辺にヤマトシジミが多量に繁殖できる汽水域の砂泥が形成されていたということになる。この環境は現地地形からみても容易に推察できるのである。そして、河口付近の岩礁域は、内湾沿岸性のクロダイ・スズキを主とした漁場が展開し、そこで大串貝塚人は釣漁法や刺突漁法による漁撈活動を行っていたのである。こうした漁法は今回出土した骨角器(釣針・ヤス状刺突具)とクロダイの遺存骨の多さから考えて、河口域でかなり定着した漁法であったと思われるのである。

なお、本貝塚出土の脊椎動物遺存体と骨角製品については、金子氏のご高配により、別編としてその詳細な所見を収録することができた。ここに改めて謝意を表するものである。

参考文献

- 田沢金吾・大場磐雄・池上啓介・宮崎 紘「大串貝塚」史前学雑誌 9-2 昭和12年5月(1937)
酒詰仲男・広瀬栄一『茨城県東茨城郡大串貝塚』日本考古学 1-5 昭和24年5月(1949)
江坂輝弥「茨城県野中貝塚調査報告」考古学雑誌 39-3・4 昭和29年3月(1954)
平山 猛「大串貝塚発見の貝刃」ひたちじ 4 昭和41年3月(1966)
井上義安・大内幹雄「大串貝塚と出土土器について」茨城先史学研究 1 昭和41年4月(1966)
金子浩昌「縄文時代の大型釣針」物質文化 7 昭和41年4月(1966)
村田文夫「花積下層式土器の諸問題」立正史学 30 昭和41年3月(1966)
下村克彦他『花積貝塚発掘調査報告書』埼玉県遺跡調査会報告 15 昭和45年3月(1970)
塩野 博他『関山貝塚』埼玉県埋蔵文化財調査報告書 3 埼玉県教育委員会 昭和49年3月(1974)
馬目順一他『大畑貝塚調査報告』福島県いわき市教育委員会 昭和50年3月(1975)
桑山竜進『菊名貝塚の研究』 昭和55年3月(1980)
下村克彦「新田野段階花積下層式土器と二ツ木式土器について」奈和 19 昭和56年5月(1981)

- 高橋雄三「花積下層式土器の研究」考古学研究 28-1 昭和56年6月(1981)
- 小出輝雄「花積下層式土器の成立と展開」富士見市遺跡調査紀要 2 昭和57年3月(1982)
- 渋谷昌彦「花積下層式土器の研究―側面圧痕文土器を中心として―」丘陵 11 昭和59年11月(1984)
- 川崎純徳・鈴木素行・吹野富美夫『大串貝塚』常澄村教育委員会 昭和61年3月(1986)
- 金子浩昌・井上義安・青山俊明『茨城町権現峯遺跡』茨城町史編さん委員会 昭和63年3月(1988)
- 井上義安『大串貝塚』常澄村教育委員会 平成3年3月(1991)

大串貝塚出土の脊椎動物遺体と骨角製品

金子 浩 昌

はじめに

この貝塚については既に戦前からの発掘調査があったこともあり、深い関心を寄せていた貝塚であった。特に1985年の発掘では調査現場にも立ち会い、出土した動物遺体についても数回にわたって精査する機会があった。しかし何故かその結果を待たずに報告書が刊行されたが、そこでは当然のことに関係資料について詳しい報告はないままであった。今回の調査は台上の地点で時期的には前期の花積下層期から黒浜期への移行期に当る。貝層の規模などについては上記の調査時に及ばないが、動物遺体、骨角製品資料はむしろはるかに多く、本貝塚の特徴を明示するものであることは疑いないところである。ここでその詳細を報告する意義もあると考えている。

記述に当たって種々ご教示いただいた井上義安氏に厚く御礼を申し上げる次第である。

検出された動物遺体の種名表

軟体動物門 Phylum Mollusca

腹足綱 Class Gastropoda

原始腹足目 Order Archaeogastropoda

リュウテンサザエ科 Family Turbinidae

サザエ *Turbo (Batillus) cornutus* (Lightfoot)

アマオブネガイ科 Family Neritidae

ウミヒメカノコガイ *Smaragdia souverbiana*

柄眼目 Order Stylommatophoda

キセルガイ科 Family Clausiliidae

ヒメギセルガイ *Vitriphaedusa micropeas*

二枚貝綱 Class Bivalvia

ウグイスガイ目 Order Pteroida

イタボガキ科 Family Ostreidae

マガキ *Crassostrea gigas*

マルスダレガイ目 Order Veneroida

フナガタガイ科 Family Trapeziidae

ウネナシトマヤガイ *Trapezium liratum*

シジミ科 Family Corbiculidae

ヤマトシジミ *Corbicula japonica*
マルスダレガイ科 Family Veneridae
ハマグリ *Meretrix lusoria*

脊椎動物門 Phylum Vertebrata

硬骨魚綱 Class Osteichthyes

ダツ目 Order Beloniformes

ダツ科 Family Belonidae

属, 種不明 gen. et sp. indet.

ボラ目 Order Mugilidae

ボラ科 Family Mugilidae

ボラ *Mugil cephalus*

スズキ目 Order Perciformes

スズキ科 Family Serranidae

スズキ *Lateolabrax japonicus*

イサキ科 Family Pomadasysidae

コショウダイ属の一種 *Plectorhynchus* sp.

タイ科 Family Sparidae

マダイ *Pagrus major*

クロダイ *Acanthopagrus schlegelii*

アジ科 Family Caranidae

マアジ *Trachurus japonicus*

カサゴ目 Order Scorpaeniformes

カサゴ科の一種 Scorpaenidae gen. et sp. indet.

カレイ目 Order Pleuronectiformes

ヒラメ科 Family Paralichthyidae

ヒラメ *Paralichthys olivaceus*

カレイ科 Family Pleuronectidae

属, 種不明 Pleuronectidae gen. et sp. indet.

鳥 綱 Class

ガンカモ目 Order Anseriformes

ガンカモ科 Family Anatidae

ヒシクイ類 *Anser* sp.

ガン類 *Anser* sp.

ワシタカ目 Order Falconiformes

ワシタカ科 Family Accipitridae

ワシ類 *Haliaeetus* sp.

ツル目 Order Gruiformes

クイナ科 Family Rallidae

オオバン *Fulica atra* ?

哺乳綱 Class Mammalia

食肉目 Order Carnivora

イタチ科 Family Mustelidae

アナグマ *Meles meles*

偶蹄目 Order Artiodactyla

イノシシ科 Family Suidae

イノシシ *Sus scrofa*

シカ科 Family Cervidae

ニホンジカ *Cervus nippon*

I. 脊椎動物遺体についての記載.

貝類については別項を参照されたい。上記表中にあるヒメカノコアサリ 1 点、ヒメギセルガイ 3 点は魚骨ブロック中であつたものである。なお、文中計測値はm.m.を単位として現わす。

硬骨魚綱 Class Osteichthyes

ダツ科の一種 Family Belontiidae gen. et sp. indet.

前上顎骨片一点がある。

ボラ *Mugil cephalus*

主鰓蓋骨の関節窩の部分と破片を検出しているのみであるが、標本の数は少ない。

スズキ *Lateolabrax japonicus*

クロダイに次いで多くの遺骸を出土したが、量的にはクロダイよりも少なく半数位である。主鰓蓋骨の検出が圧倒的に多く、歯骨がそれに次ぐ。主鰓蓋骨は必ずしも丈夫な骨質ではないが、特徴的な骨であり小片でも検出が可能である。歯骨、角骨も同様に特徴的な形態であるが、細長く破損率が高くなる。その他の内臓骨も破損率が高く数は少ない。擬鎖骨が多く、この部分から頭部のはずされたことが推測される。頭部を構成する内蔵骨の多かつたのもそのためであろう。

椎骨は少なかった。腹椎骨7点、尾椎骨11点があり、そのうち1点のみが体長50cmになる位の個体のもので、他はそれよりも小さい個体の椎骨であった。椎骨自体の少ないこと、特に大形個体の椎骨がなかったことがクロダイの場合とも違う在り方を示していた。

体長、個体数の復元には数の多い左側歯で調べた。左側近位骨端高は14.7がもっとも高い歯骨で1点、12.4前後が3点（体長65cm）、10～11.0が3点（体長59cm前後）、6.0～9.3（50cm前後）が9点、5.4が1点、4.4（右側）が1点であった。歯骨高から推定して50cmから70cmという個体が主として採られていたことになる。

コシヨウダイ *Plectorhynchus* sp.

前上顎骨の破片一点がある。両標本とも大形の個体のもので、破損はしているが形態的な特徴を看取できる。コシヨウダイ類は外海の魚であり内湾貝塚からの遺骸の出土は少なく、出土例も稀である。

マダイ *Pagrus major*

マダイは前上顎骨、歯骨を検出できなかったが、上後頭骨、角骨の関節部の破片がある。いずれも小破片で魚骨片の中から検出できたものである。このような破片が他にもあるかも知れない。上後頭骨は特に大形の個体のものではないが、角骨は本貝塚で出土しているクロダイよりもはるかに大きな個体のものであった。

クロダイ *Acanthopagrus schlegeli*

もっとも多くの遺骸を出土し、かつ大形個体が主体であることをよく示していた。特に前上顎骨と歯骨が多く残されていたが、この二つの顎骨を除くと他の部位はきわめて少ない。タイ類の前上顎骨、歯骨の骨質が頑丈でよく保存されたからであり、また調査時にも注意してこれらが採取されたからであろう。その他の内臓骨については貝層のブロック採集資料から検出したものであったために数が減少したものと思われる。他に検出されたクロダイの内臓骨では、口蓋骨、前鰓蓋骨、舌顎骨、角骨が多く左右いずれか片側づつで10～11点があった。鼻骨、主鰓蓋骨、間鰓蓋骨、後側頭骨、上擬鎖骨などは左右片側づつで4点前後と少なかったのは骨質が弱いために破損して確認できなかったためであろうと思われる。もっとも少なかったのは頭骨関係の骨格で破片のみであった。全体としてみれば内臓骨、肩帯の骨格などよく保存されていた例であろう。おそらくこの場所で解体され、ここから持ち去られた部分もあったのであろう。

椎骨は70点があるのみで、推定される個体数からみると少ない。椎体の大きさは、ほぼ内臓骨の諸骨から推定される下記の体長の個体のもつ椎骨が検出されている。大形の尾椎骨40点で椎体長10.5～11.5、小さい椎体30点で7.5～8.5前後である。椎骨中第一腹椎骨2、第二腹椎3、他の腹椎14点であった。椎骨が調理をしていく上で分離し、分散する可能性は高い。数の少なくなるのもそのためであろう。

クロダイの骨格は大形のものが多く、左側前上顎骨42点のうち前上顎骨長の特に大形のもののは39.3, 38.4, 同長30.0までが30点, 以下23.0までが11点, 最小15.2が1点であった。前上顎骨でその長さが38.0を越えるのは体長も40cmを越える大物であるが, 前上顎骨長30.0で体長35cm, 前上顎骨長23.0でも体長30cmはある。最小の15.2で25.0cm前後はあった。

マアジ *Trachurus japonicus*

歯骨左2, 右1それぞれ別個体のもので, それと尾椎骨数点がある。歯骨, 尾椎骨とも大形のものである。マアジは縄文貝塚でもっとも一般的にみる魚種であるが, これほど大きな歯骨を貝塚出土骨にみるのは稀である。椎体長10.2, 歯骨高(連合部) 6.5。

カサゴ科の一種 *Scorpaenidae gen. et sp. indet.*

歯骨一点がある。メバル類に近い形態をもつが属・種を査定し難い。

ヒラメ *Paralichtys olivaceus*

大形の歯骨が一点あった。左側舌側の骨壁の一部を残すのみの破片であるが, 残存部分から推測できるもとの歯骨の大きさは, 歯骨全長が80mm位の大きさになるものであったろう。他に破損した口蓋骨, 擬鎖骨, 尾部棒状骨片が出土している。口蓋骨左右は同一個体の可能性もある。いずれも大形の個体のものである。二個体位はありそうである。

カレイ科属・種不明 *Pleuronectidae gen. et sp. indet.*

尾椎骨2点がある。椎体長4.0の同じ大きさの椎骨である。同一個体の椎骨であろう。メイタガレイ属*Pleuronichthys*に近い形態であるが, なお調査が必要と思われる。

骨ブロック中のスズキ・クロダイ検出主要遺骨出土表

部 位	スズキ		クロダイ	
	ℓ	r	ℓ	r
鼻 骨			1	5
鋤 骨	3		—	
前 頭 骨	—		1	
頭 頂 骨	—		—	
副蝶形骨	7		3	
前上顎骨	3	4	49	42
主上顎骨	7	10	5	4
歯 骨	19	14	27	32
角 骨	10	5	4	11
方 骨	—	1	1	—
口 蓋 骨	1	—	8	10

部 位	スズキ		クロダイ	
	ℓ	r	ℓ	r
顎 舌 骨		1	3	2
角 舌 骨	1	—	2	2
上 舌 骨	—	—	1	—
前鰓蓋骨	3	1.3	9	11
主鰓蓋骨	2	27	5	3
下鰓蓋骨	—	—	4	4
間鰓蓋骨	—	—	4	4
擬 鎖 骨	13	13	—	1
上擬鎖骨	3	4	3	4
後側頭骨	1	2	4	—
腰 骨	—	—	3	4

部 位	スズキ		クロダイ	
	ℓ	r	ℓ	r
腎臓血管間棘		2		34
腎臓第2棘	5		29	
第1腹椎骨	—		2	
第2腹椎骨	—		3	
腹 椎 骨	6		14	
尾 椎 骨	13		71	

鳥綱 Class Aves

ヒシクイ類 *Anser* sp.

右側烏口骨と左側手根中手骨各一点が破損して一部出土。

ガン類 *Anser* sp.

マガン位の大きさの尺骨片一点。

ワシ類 *Haliaeetus* sp.

右側手根中手骨の破片，左側尺側手根骨，左第三指骨基節骨各一点がある。基節骨は完存し大形で頑丈な骨質を残している。基節骨全長45.7

オオバン? *Fulica atra* ?

右側大腿骨があるが，近位骨端を欠く。

哺乳綱 Class Mammalia

アナグマ *Meles meles*

右側下顎骨の破片が一点のみ検出されている。P₄，M₁が残されている。M₁歯冠長15.2，同幅6.5。大形の臼歯である。

イノシシ *Sus scrofa*

大形の下顎骨一点があったのみである。別に検出されている四肢骨にはイノシシのものは無かった。下顎骨は遠心部分の破片で，骨体部はM₃の部分で折れ，M₃の近心部も破壊されている。おそらく解体された下顎骨をさらに二つに割ったのであろう。骨体には打割った際についた傷がこの。下顎枝の突起部分は折れて現存しないが，割れ口からみて今少し残っていたかも知れない。

この下顎骨はM₃部の骨体が厚いことから雄獣であったことが推測される。M₃の咬耗は最後部咬頭のエナメル質に小穿孔がみられるところから，4～5才位の個体である。この下顎骨切断は犬歯を抜き取ることが目的であったことも考えられる。

ニホンジカ *Cervus nippon*

頸椎：ほぼ完存する。やや小さい標本で後関節が外れる。骨体周囲の突起，骨体稜などが破損するが，前関節突起から後関節突起を繋ぐ稜の左側中央が深く括れ，人為的な加工である。

椎骨では他に腰椎の椎弓部と椎体片がある。これにも打割ったと思われる痕跡がみられる。

鹿角：角座部から角冠部直下までをのこす落角標本があるが(第25図)，その他様々な状態で残された鹿角片がある。それらのほとんどに切断などの加工痕が明瞭に残され，これらが製品の素材として扱われたことをよく示していた。これについては別に項を立てて記述したい。

計測部位はA.v.d Driess (1976) による。

肩甲骨：頸部最小幅 (SLC) 23.4 新しい破損が目立つ。

上腕骨：一点があったのみである。近位部の破片であるが骨端はない。外れた部分も失われている。当初骨体のほぼ中央で折れたらしく、螺旋形の折れ口をみる。

橈骨 1：近位端幅 (Bp) 40.8 左側橈骨である。近位骨端に比較的近い位置で折られ、螺旋切痕をみる。

橈骨 2：遠位端幅 (Bd) 40.0。上記した標本と同じ左側であるが、近、遠位骨端の幅の比率からみるとこの橈骨の方が小さくなり、別の個体であろう。大形の標本で骨体のほぼ中央で折れる。骨体の前面にのみ当初の面が残るが、その折れ口は螺旋状ではなく叩き割った感じである。その部分が焼けているらしい。

中手骨 1：左側。近位端幅 (Bp) 32.8。近位骨端に近い位置で折られ、後面は縦方向に裂かれた痕跡をみせる。

おそらくこの縦割りの方が先に行われた作業であったのであろう。

中手骨 2：関節骨端の一方を欠き左右不明。遠位骨端に近い位置で折られ、縦方向に裂かれている。

中手骨 3：前面部を縦に裂いた破片 1。

大腿骨：左側近位部分で骨端を欠く骨体部標本と、同じ左側で遠位骨端部分のみの破片とがある。骨体を残す方は骨壁が薄く若い個体のように遠位端をかじられて失う。この二つの標本はほぼ同じ位の大きさのものであったと推定され、同一個体であったかも知れない。

脛骨 1：右側遠位部に近い骨体の破片。遠位骨端寄りの破損は新しく骨端のあった標本であったかも知れない。骨体中央寄りの割れ口は古く、打撃点を思わせる鋭角な割れ方がみられる。

脛骨 2：右側遠位骨端。遠位端幅 (Bd) 36.8。ほとんど骨端に近い部分を残す。当初から意図的にこの位置で割っているのである。

踵骨：右側。近位骨端を失い、遠位骨端の骨端骨は外れている。骨体は小さく若い個体である。

中足骨：骨体部の前面部 1、後面部 1、後面部の左右骨稜部 4 点がある。大きさの違う骨が少なくとも 3 乃至 4 点はある、縦方向に割れているのが上記の 4 点である。

基節骨 1：完存。右側に位置する。全長 (GL) 55.0。

基節骨 2：近位骨端の骨端骨のみを残す。右側に位置する。

基節骨 3：遠位骨端部右側。

イノシシ/シカ

イノシシ、シカを区別できる標本は以上であるが、破片はこの他に肋骨片 2、肢骨片 1 がある。

大串貝塚の脊椎動物遺体について

魚 類

日本の新石器時代貝塚の魚類を代表するクロダイとスズキがここでも主体的な魚種であった。しかし、東北南部から関東地方以西の多くの貝塚魚類の出土例にみるようにクロダイが主体的で、スズキははるかに少なかった。本貝塚が形成される自然条件となった旧瀬沼の広い内湾域の水域の環境を反映してのことであったのであろう。クロダイにとっては棲息に好条件であった内湾もスズキのように潮通しの良いところを好む魚にとっては不向きであったと思われる。

この二種の漁獲に釣針が多く用いられたとすると、漁獲されているクロダイ、スズキの多くがかなり大形の個体であったことと併せ考えられよう。

鳥 類

上述したようにワシ類の遺骸、ヒシクイ、ガンなどの遺骸が本貝塚の鳥類を特徴付けている。ワシ類の骨は手根中手骨、指部基節骨という翼骨先端の骨で、橈・尺骨から切り離されたものと思われる。この部位の骨には初列風切という大形の羽根が付く。そのために切り離された部分であったと考えられる。ワシ類の遺骸の検出はガンカモ類などに比べると早、前期では特に稀である。捕獲が容易でなかったことによるのであろう。

ヒシクイの鳥口骨は胸郭の一部をつくる骨であり、比較的よく残される部位である。手根中手骨がやはりみられる。これも羽根を利用しようとした骨の扱いなのであろう。

本遺跡鳥骨の出土は多くない。また鳥骨のうち原形を残すのはごく一部であって、そのために同定が困難となった標本もある。本貝塚のような立地条件にある場合には普通ガンカモ類を主とするが、ここではむしろ少なく、少量づつ特殊な種類があった。後背の内湾域でのガンカモ類の棲息数あるいは捕獲条件が思わしくなかったことによるのであろう。本貝塚の鳥類の特徴である。

獣 類

獣骨の出土は少なかった。しかし縄文時代前期という時代性を考えるとみるべき資料があったとしなくてはなるまい。イノシシ、シカ、アナグマがあり、アナグマ、イノシシは下顎骨各一点が遺骸のすべてで、四肢骨は全くなかった。1985年度の調査資料中のイノシシには四肢骨のあることを筆者は確認しているが、顎骨に比べるとやはり少なかった。顎骨が運ばれるのは、犬歯や骨髄利用が考えられ、この下顎骨にも骨を割った痕跡がみられる。

ニホンジカは四肢骨を多数出土していたが、顎骨は一点もなかった。これも1985年度の資料中には顎骨もあるので、この地点の特殊な事情かも知れない。ただ、顎骨などがあまり運ばれていなかったことは確かであろう。もちろん、四肢の部分の食用としての有用性が第一に考えられていたからである。

シカの遺骸で目立ったのは角である。おそらくそのすべてが製品の素材として使うためにもたらされたのであろう。シカの遺骸の多かったことも、角を得る目的があったからと推測される。

アナグマはタヌキなどに比べると出土例の少ない獣である。

骨角製品

鋏 第21図(1), 図版第5・10(8)

鹿角製, 柄部末端を僅かに欠損する。器体部と柄部を明瞭に分割できないつくりである。先端部の僅かに幅の広まる部分はよく研磨され, それ以下が次第に細まり, この部分に器体に平行する擦痕が観察される。おそらく矢柄に挿入されたのはさらに末端部になる。現長50.5.

やす状刺突具 第21図(3), 図版第10(9)

骨製, おそらくシカの中手もしくは中足骨が素材である。先端はよく研磨されているが, 左右非対象で整った形ではない。幅の狭いつくりで, やすとして使われたとすれば今少し長い柄があったであろう。現長38.5.

針

1. 骨製, 頂部のみを残す。頂端は尖るがそこから僅かな膨らみをつくり装飾的な加工になる。全体の加工は丁寧でなく, 凹凸や荒い擦痕がのこる。現長26.4. 第21図(下段2), 図版第10(13)
2. 骨製, 頂部のみを残す。先端を尖らせていたと思われるが欠けている。僅かな膨らみがみられ, その部分に浅い抉りを斜めにいれた装飾的な加工がみられる。しかしこの部分も破損するので加工の完全な形態を知ることはできない。現長39.6. 第21図(4), 図版第10(10)
3. 骨製, 針の頂部浅い切り込みがつけられているが, 装飾的な加工である。全体の加工は精巧ではなく, 荒い擦痕と細かい擦痕とが入り交じる。細かい擦痕は器体に直交するように側面に部分的につけられているようである。現長28.3. 図版第10(12)
4. 骨製, 頂部を失い, 尖端の部分のみを残す。シカの中足骨後面の片側の稜の部分縦に裂いたものを使っている。この製品の厚さは3mmで, この厚さで縦裂きをしているのである。製品の表面とした滑らかな面は中足骨の自然面がそのまま残され, 反面は裂いたときの面が残る。加工痕は針先を尖らす際の擦痕がみられるのみである。現長44.4. 第21図(5), 図版第10(11)

釣針

1. 軸部の破片である。破損部が新しく, 埋没時にはさらに長く残されていたはずである。軸端が少し曲がるので, 湾曲部に近いと思われる。鹿角の緻密部分のみが残され, 表面には縦方向に走るやや荒い擦痕がみられる。最終の整形をした痕跡である。軸頂には2本の溝がつけられ, この部分を縛ったために擦れた痕跡がみられる。軸は直行するが, 多少内側に抉れがみられるのは釣針の製作時の穿孔の痕跡である。現長77.6. 第21図1, 図版第9(2)
2. 軸部, 軸頂から湾曲部の基の部分までを残す。軸は頂部でかなり細くなり, 軸の下端の湾曲部で幅広く厚い。軸の外側には鹿角の自然面がほとんどそのまま残され, 内側に加工痕が残さ

れる。加工痕は軸に直行する小さくやや荒い切痕がみられ、この傷は素材となった鹿角板をくり貫く際についた痕跡である。その上面を軸に平行する整形のための擦痕が走る。軸頂には二本の袈りが入り一部連結して溝状を呈する部分もある。この釣針で特徴的なのは軸部外側の鹿角の自然面の残された状態で、この釣針のつくられる素材が鹿角の輪切りを縦に半裁した「かまぼこ」型のものであったことをよく示している。現長62.2。第21図2，図版第9(4)

3. 軸部。上記製品とほとんど同じ保存状況。軸全体は太めでほぼ均一な径である。

軸表面に鹿角の自然面が残るが研磨されて僅かな凹凸を残すのみである。この凹凸を削る際についた傷があるほかは、縦方向の擦痕を主にみる。軸が全体に反り返るようなかたちをとるのは素材になった鹿角の曲がりによるのである。

軸頂部には二本の溝がめぐり、溝の内側はこすれて滑らかになっている。糸の巻付けられていた証拠である。現長61.7。第21図3，図版第5・9(3)

4. 軸部。保存は上記3標本と太めの軸で軸頂までの軸径は大きく変わらない。軸下半に鹿角の自然面が残るが削っている痕跡がみられる。またこの部分の横位から斜めの方向に削る荒い切痕が顕著で、その後縦方向の削りで、整形するような工程であったようである。

頂部の先端は斜めに切れて素材の切断面そのままが残る。その直下に幅広い溝が二本つくられ、溝にはものを巻き付けた痕跡が明瞭である。現長39.0。第21図4，図版第9(5)

5. 湾曲部の破片。湾曲部から鈎先にかけてを残す小片である。両端の折れ口は新しく、今少しつづく部分のあったことが予測される。今回の調査で釣針のこの部分を残す標本として得られたのはこの一点のみである。形態的には丸みが強く、かつ扁平な断面をもつ。記述した釣針の軸部から推測される湾曲部はむしろU字型である。本標本から考えられる釣針のかたちはまた別であるかも知れない。現長20.3。第21図(5)，図版第9(6)

加工痕をもつ鹿角片

角座部分1：落角である。角座から30mm程の高さをもつもので、角座の直上で切断されている。角幹部の周囲には切断時についた切痕がみられ、鹿角の緻密質部分が石器で打叩かれ、やや不規則ではあるが明瞭な刃跡をみる。周囲の緻密質部分を切断した後に海綿質部は折ったのであろう。角座部分の径43.7×47.0。第23図6，図版第9(1)

角幹部部分3：片側もしくは両端に切断跡を残すもの。一点を除いて縦に割られている。長さは57.0、71.5、88.0を計測するが、短い方の2例は意図的にこの長さで切断されているとみられる。(第21図7・8，図版，5，6)

別の一点はさらに長く、現長145.0mmである。角冠部分であり、その先端は折れてない。中間に第三枝の分岐がみられるが、基の部分を残すのみである。興味深いのは基の部分から80mmの場所

に角幹周囲をめぐる線刻があり，ここを切断位置に設定した目印に違いない．にも拘らずここで切断しようとしなかったのは，この部分の湾曲が強く，釣針制作に適さないと判断したからであろう．このような例をみると，釣針制作のための素材とすべき鹿角があった場合，あらかじめこの程度の長さに目印が付けられていったことが想定されるのである．第23図(1)，図版第9(2)

かなり太い鹿角の幹部破片がある．長さ85.0，幅28.0で，もとの三分の一位が残るのであろう．板状になってはいるが偏平な面がつくられていないので，釣針の素材としては不適当なものであったのであろう．両端の切断は角幹周囲を叩き割る方法で，角幹をこのようにして輪切りにしてから，縦割りをしたと思われる．

その他の切断痕をもつ鹿角品：次の三点がある．

1) 枝の後面に当たる位置に枝に平行して延びる切り込みの溝が入る．溝の先は細い線刻となっており，さらに角の先まで延びていたようである．枝を二つに割ることが目的であったとみられる．第一枝の基部に近い部分のやや前後に平たくなっているところを使うつもりであったのであろう．しかし，この作業はこの段階で終わっている．図版第9(7)

2) 両端と中間の三ヵ所に切痕がある．周囲から切り込みをつけ，その後折り取るようにする加工法である．

角幹部の径が22.5×16.5という細さなので二尖に分かれる程度の角であったと思われる．分岐部はその基の部分で二面から打折っている．このような鹿角片から，70.0位の長さのものを使うとすることが分かる．第23図2，図版第9，4，9(4，9は接合)

3) 細い尖端部分でももとの折れ口は一部に残るのみである．第23図5

釣針未成品もしくは素材

1. 鹿角の分岐部を残すもの 第21図6，図版第9(8)

太い角幹部と強くくびれて分岐する枝の基部がみられ，この部分が第一枝の分岐部であることを示している．くびれの状態から右側の角であることがわかる．全長79.0，最大幅49.6．第一枝直下と分岐部より僅かに上がった位置で切断されている．上下の切断部にはここを切断した際についた石器による切痕が角幹に平行する方向で細かくつく．石器を打ち込む方向を示すものといえよう．この切断痕は鹿角緻密質部分の半ばに及ぶが，それ以上は折り曲げるようにして海綿質部分と共に切断している．

この鹿角は縦方向に半裁されているもので，この切断には丹念な擦り切りの技法が試みられている．あらかじめ輪切りにされたものを角幹と枝部含む面で半裁するのである．海綿体のみえる側の両側に縦に割ろうとした際についた擦り切り跡がはっきりと見え，この擦り切りの及ばない分岐部の中央は切り裂くような方法で分断したようである．現存する角幹部の厚さ22.0に達して

いる。

2. 釣針未成品の破片 第21図8, 図版第9(1)

半裁された「かまぼこ型」の角幹片で、角幹部分には角を輪切りにした際の打ち叩いた切断痕がみられ、その状態は上述した鹿角にみるのと同じ加工痕である。角幹緻密部の表面には叩き痕がつき、それがこの部分をえぐって海綿体の直上に達している。この破片が原形をそのまま残すものか明かでないが、釣針をこうした鹿角の加工から製作する例は知られている。

現長50.0, 同幅31.0, 最大厚16.5

3. 釣針加工途次の破片

「かまぼこ」型鹿角片の一方の端で、おそらく釣針の湾曲部に当たる部分が残されているのであろう。既に釣針となる外周にも整形が加えられ、丸みがつけられている。内側の挟り面もやや滑らかな加工面となっている。おそらく釣針の外形となる鈎型ができていたのではなかったかと思われる。ただし小片のために原形の詳細を知り得ない。現長21.3

鹿角製鏃の未成品 第21図6 図版第10(7)

一点がある。素材は鹿角を縦に打割った破片で、特別なかたちを意図していたものではなかったと思われる。しかし幅広く厚みをもっている方の端は、研磨されて鏃の尖端部をつくり出しているようである。おそらくこれが最初の加工なのであろう。次に器体部そして柄部がつくり出されていくのではないかと思われる。このような事例は少なく興味ある遺物といえよう。

大串貝塚出土の骨角製品について

大串貝塚のこれまでの幾度かの発掘調査のなかで、今回はかつてない程の数で、また良好な骨角製品を出土した。本遺跡ではこれまでにかかなりの規模の貝層が調査されたことがあったにも拘らず、こうした資料の少ないことからここでは目立った骨角器の製作が行われなかったのではないかという憶測さえあったのである。そうした予測をくつがえず結果となったが、これは骨角製品のみ多かったのではなく、上述した製品の素材となった豊富な鹿角の出土と見合う在り方であったのである。

釣針

もっとも多く出土していた。完存するものはなく、軸部など限られた部分が残されていたのみであったが、ほとんどが使用中の破損であり、こうした釣り漁業の盛行を予測させて興味深いものがある。釣針関係の資料としては、製品と素材として何段階かに亘って加工された鹿角がある。詳細は上述したので、この時代の骨角製品の製作技法の問題について述べておきたい。

製品の形態上の特徴

釣針の大部分は軸部のみを残すもので、それらは多少の湾曲はみられはしたが、大体直軸的なつくりであったと思われる。そしてこれらは鹿角を輪切りにし、縦割りにした「かまぼこ」型のものが素材であった。完存する釣針がないが、おそらく形態は軸部と鈎先部分は平行するU字型で、湾曲部は円筒形鹿角の断面形に影響された独特の突出した曲がりをもつ形態になったと思われる。それは福島県磐城地方において盛行した独特の製作法によって作られた釣針の形態をもつものであった。

こうした釣針の製作技法は1962年のいわき市大畑貝塚の発掘調査によってはじめて明かにされた。この貝塚は縄文中期に属し、多くの魚骨と釣針と製作過程を示す遺物が出土した。これによって素材の選定から製作の工程を詳しく知ることができたが、その前年1961年いわき市平鎌田字小山下にある弘源寺境内で知られた縄文前期関山期に属す貝塚が発掘されていて、これと同様の製作技法を示す遺物が知られていた。しかしそれを確認できたのは大畑貝塚の発掘（1962年度）の後で、弘源寺貝塚のよく知られる未成品も後になって接合されたのである（文献、金子、1964、P.33）。その後1973年相馬郡小高町の宮田貝塚の発掘においてもこの前期関山期の釣針未成品があり、同様の製作技法のあったことを思わせるものであった。

今回の大串貝塚の釣針関係の資料は、いわき地方で知られた前期資料よりも多く、しかも良好なものであったが、このことは大畑貝塚で知られた技法がこの地の前期に既に確立していたことを証するものであった。

このように釣針の製作の方法が基本的には中期のそれと変わらないところから、製品の形態にも類似してくる点のあるのは当然である。全体の形態が軸部と鈎先が平行するU字型であることも、1985年度の出土資料に見るとおりである。しかし完製品の器体に残る整形の痕跡をみると、中期の製品では研磨加工が行き届いているのに対して、前期のは素材からの製作時についた傷が研磨されずに残され、整形の荒いことを感じさせる。また、軸頂の部分の加工は、中期の場合は軸の外側に刻みをつけることがもっとも多いが、前期では溝をつける。釣糸の作り方、それを結び付ける際の結び方など中期とは違っていたのではないかと思われる。

ところで縄文前期の釣針を多く出土した貝塚として神奈川県横浜市港北区菊名町菊名貝塚がある。前期花積下層期に属するものとされる。この貝塚からは素材となった多くの鹿角が出土し、また釣針製作の直接の素材となった鹿角の加工品もある。菊名貝塚の釣針も大串貝塚の例と同様完存するものはなく、軸部と鈎先を別々に残していた。やや細目の軸で、多少の湾曲がみられ、表面に加工時の傷が多数みられる点は共通している。この特徴は釣針が同じ様な方法で作られたことを推測させる。つまり鹿角の打欠きによる鈎型のくり貫きであるが、菊名貝塚でもそのような加工痕をもつ鹿角片がある。しかし大串貝塚同様に直接関係のある資料は少ないようである。現在のところ大串貝塚と関連の深い資料としてはいわき地方貝塚例を除けば菊名貝塚が比較対象

になるであろう。また菊名貝塚の諸資料が広い意味での花積下層期に属するものであるとすると、大串貝塚はそれよりもやや新しい時期になる。

東京湾湾口部と房総半島をめぐる太平洋沿岸地域のルートを考えると、縄文前期の釣針の出土例として千葉県夷隅郡大原町の新田野貝塚での花積下層期の釣針がある。軸頂の形態も基本的には大串貝塚例と共通したものがみられ、おそらく製作も同じ技法でつくられたのであろう。技術的な交流があったのである。

鹿角の角幹の中央を削り込むような技法は早く縄文早期田戸下層期にはあったことが、神奈川県横須賀市夏島貝塚で知られている。そして早期末葉期には大小の釣針を鹿角でつくり、大きさに応じた素材の扱い方を考え出している。本貝塚からも出土した鹿角の第一分岐部を切断半裁したものは外反りの強い、釣針全体の幅の広いかたちのものでできたはずである。このかたちの釣針は、東京湾湾口部でもつくられ、さらには現霞ヶ浦沿岸地域にも波及し、茨城県東茨城郡小川町所在の野中貝塚にその好例をみる。本貝塚でもそのような釣針のつくられたことが推定されるのである。

鏃あるいはやす状刺突具と針

鏃：鹿角を使った器体部と柄部が明瞭に分かれない単純なかたちである。上述の新田野貝塚の前期層出土品と類似した形態になる。

やす状刺突具：完存品はないが、シカの中手もしくは中足骨で短く、細身の作りである。

針：完存品はない。シカの中手もしくは中足骨製。頂部の装飾加工がみられる。新田野貝塚には丁寧な頂部加工品をみるが、それとも共通するものなのであろう。

以上新たに知られた大串貝塚の骨角製品についての、形態的な特徴をこれまでに知られた幾つかの出土資料と比べ、その意義を述べたが、大串貝塚の新資料は関東から東北部における前期の骨角器文化の解明のためにきわめて重要な価値をもつものであることを確認できたのである。

参考文献

金子浩昌：縄文時代における釣鉤の製作，物質文化 3，1964

金子浩昌：縄文時代の大型釣鉤，物質文化 7，1965

馬目順一：骨角牙製品，大畑貝塚調査報告—いわき市泉町下川字大畑所在—所収，福島県いわき市教育委員会，1975

渡辺 誠：骨角器，福島県相馬郡小高町宮田貝塚，福島県相馬郡小高町教育委員会，1975

立教大学考古学研究室：新田野貝塚—千葉県夷隅郡大原町所在の縄文時代貝塚—，立教大学考古学研究会調査報告 2，1975

桑山竜進：菊名貝塚の研究，真陽社，1980

佐藤典邦：骨角牙製品，弘源寺貝塚－縄文時代前期貝塚の調査－，福島県いわき市教育委員会，1986

金子浩昌，忍沢成視：骨角器の研究，縄文編 I，II，慶友社 1986年

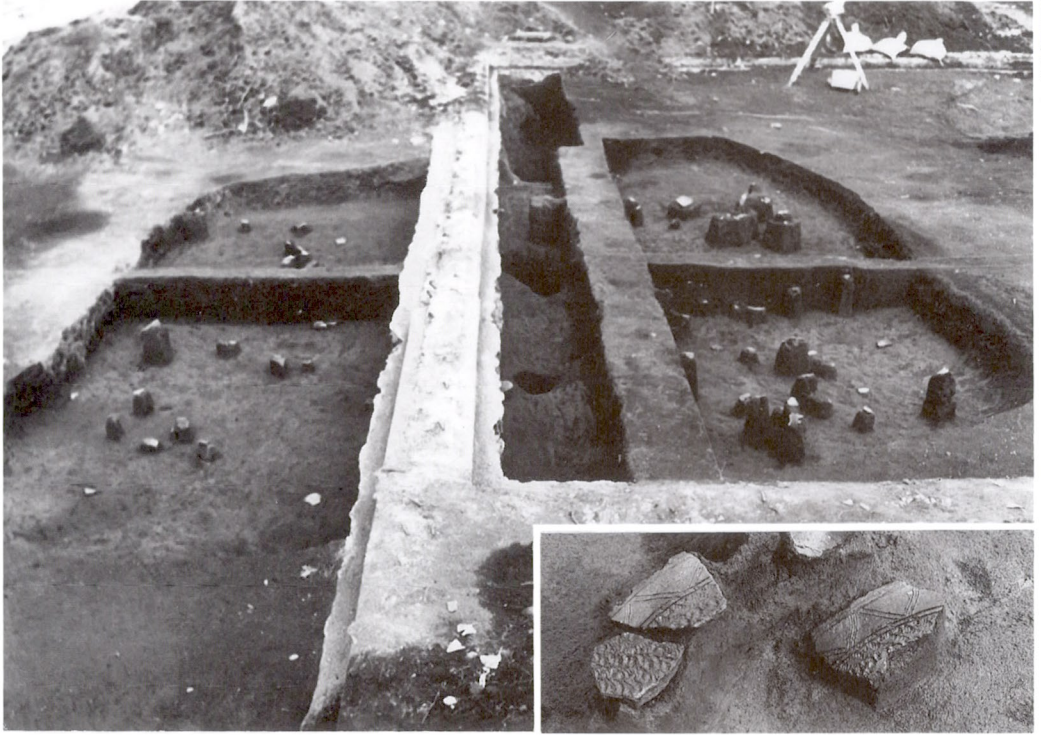
写 真 图 版



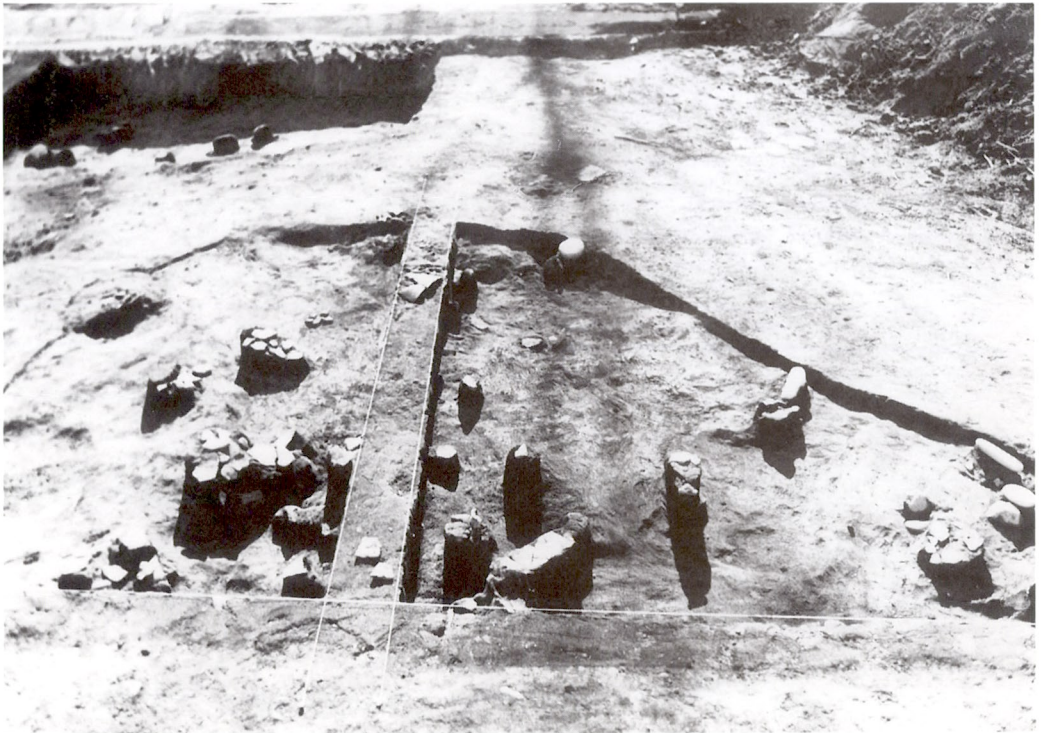
1 大串遺跡A地点の現状〈西から〉



2 大串遺跡B地点の現状〈北から〉



1 第一号住居址の遺物出土状態〈西から〉



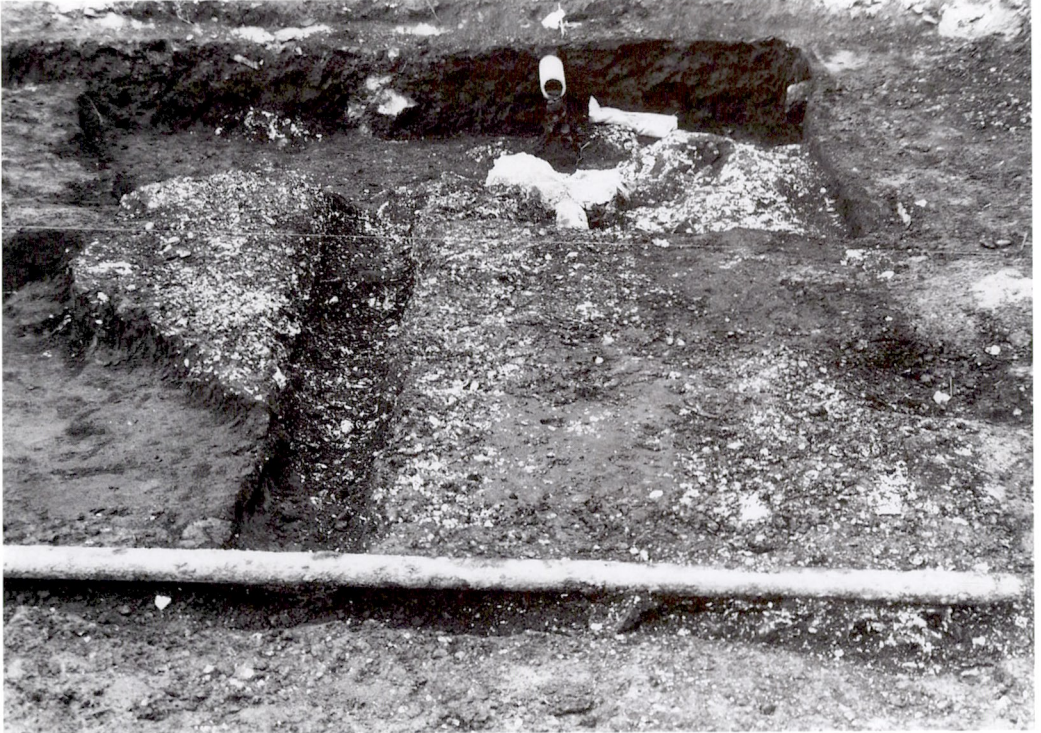
2 第二号住居址の遺物出土状態〈北から〉



1 第三号(上)第四号(下)住居址の全景〈西から〉



2 第四号住居址(下)の貝層堆積状態〈西から〉



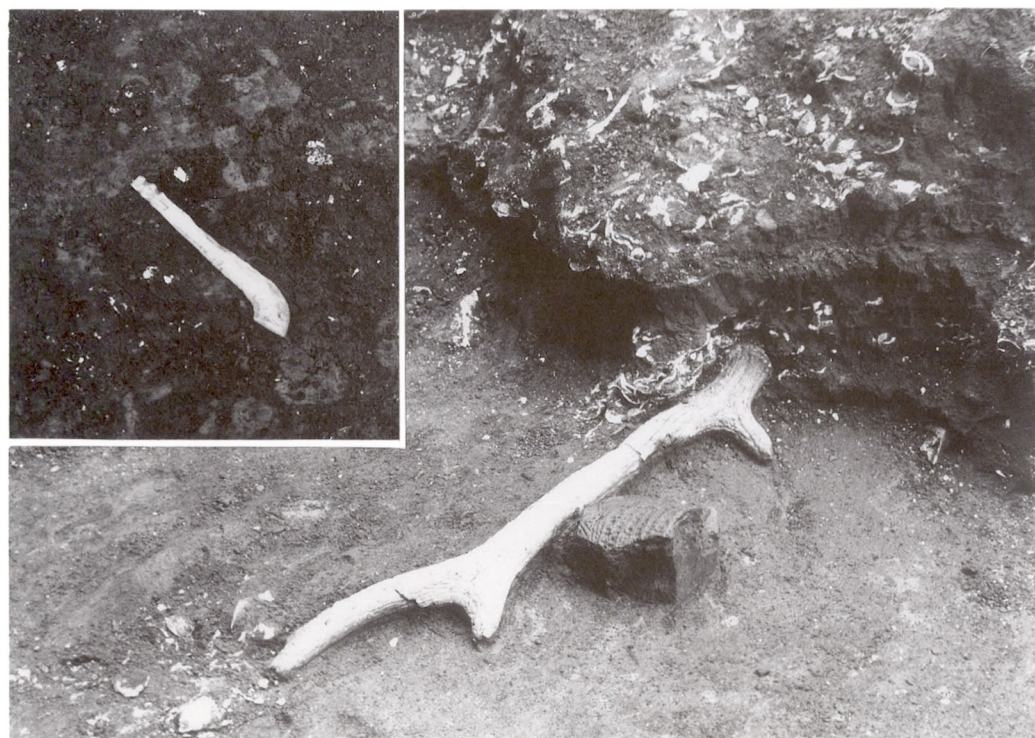
1 第四号住居址の貝層堆積状態〈北から〉



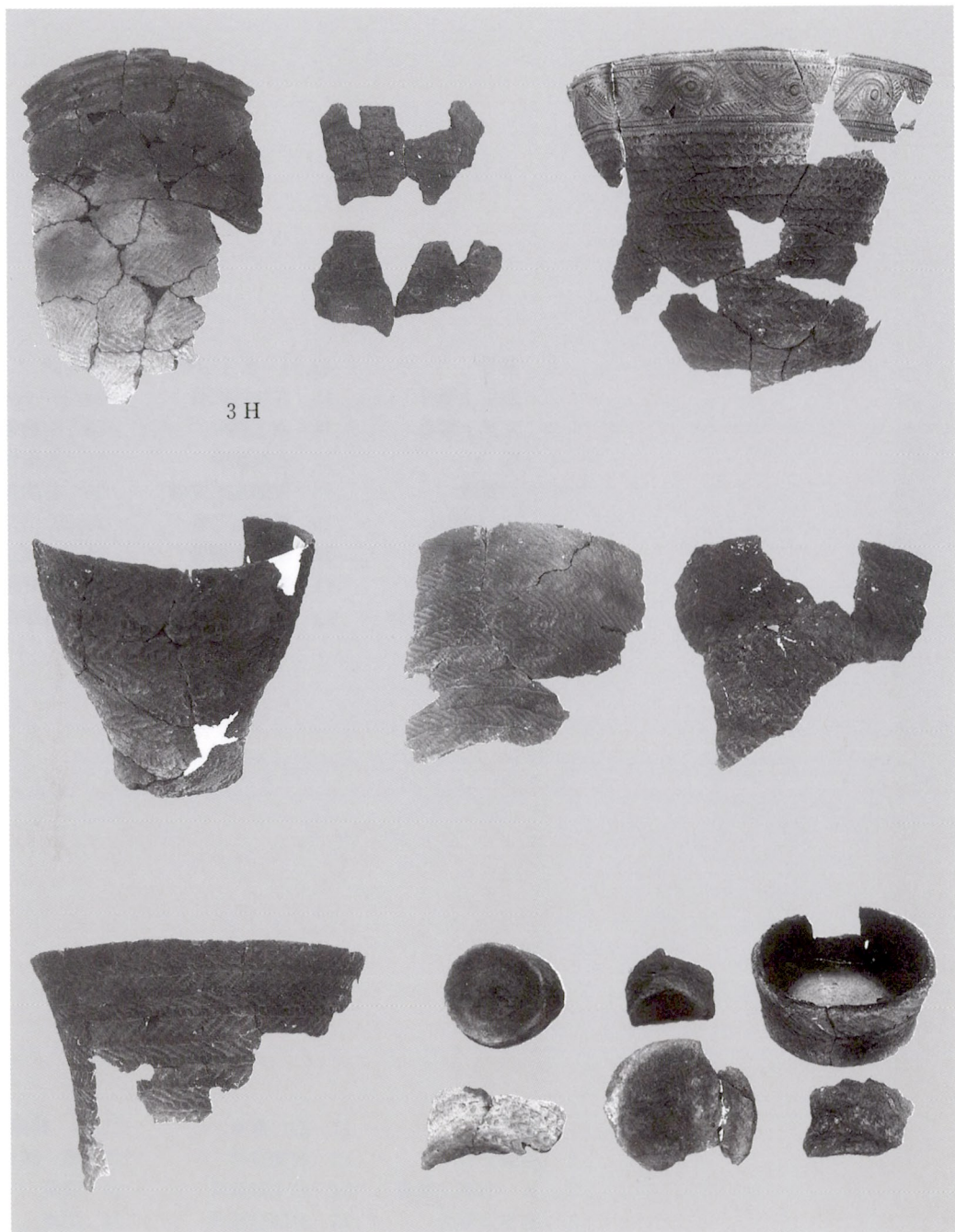
2 第四号住居址の貝層断面〈北から〉



1 第四号住居址の遺物出土状態(1)



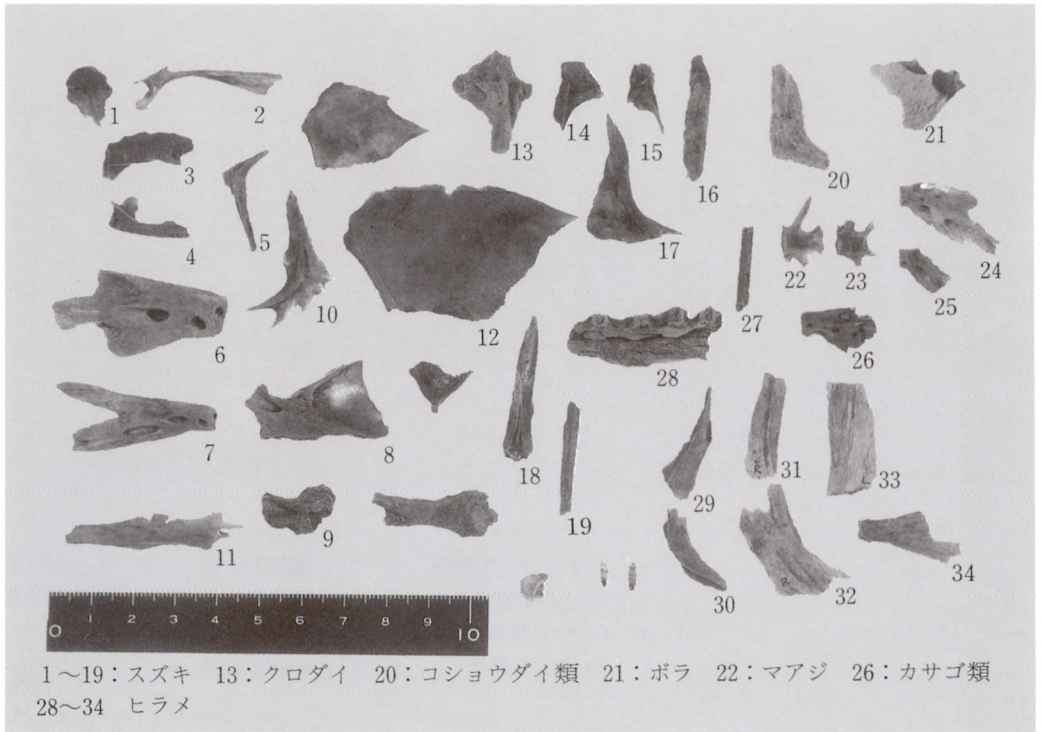
2 第四号住居址の遺物出土状態(2)



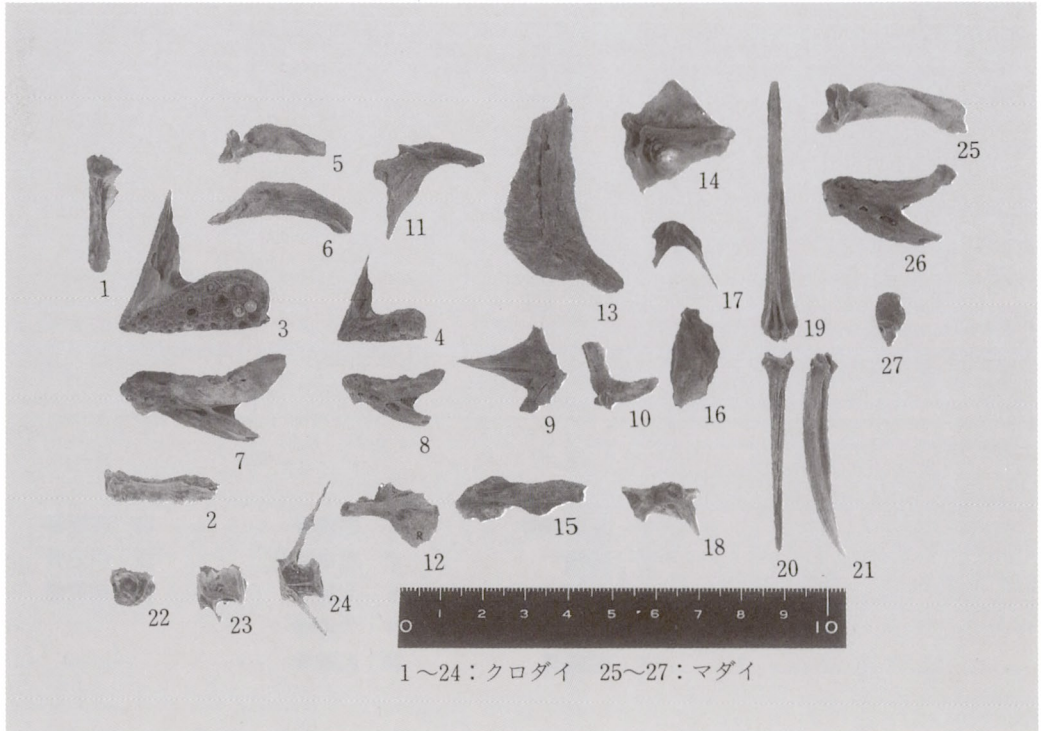
第三·四号住居址出土土器

1 鋤骨	13,14 右舌顎骨	23 同
2 右主上顎骨	15 左後側頭骨	24,25 左齒骨
3 左前上顎骨	16 右上鎖骨	26 左齒骨
4 同	17 右擬鎖骨	27 左齒骨
5 口蓋骨	18 臀鰭血管間棘	28 右齒骨
6,7 右齒骨	19 臀鰭第二棘	29,30 右口蓋骨
8,9 右角骨	20 左前上顎骨	31,32 右擬鎖骨
10 左前鰓蓋	21 左主鰓蓋骨	33 左擬鎖骨
11,12 左主鰓蓋骨	22 尾椎骨	34 尾部棒狀骨

1 右鼻骨	11 右口蓋骨	21,21 臀鰭第二棘
2 副蝶形骨	13 前鰓蓋骨	22 第一腹椎
3,4 右前上顎骨	14 右主鰓蓋骨	23 腹椎
5 右主上顎骨	15 右間鰓蓋骨	24 尾椎
6 左主上顎骨	16 左上擬鎖骨	25 右主上顎骨
7,8 左腦骨	17 左後側頭骨	26 左齒骨
9 左角骨	18 左腰帶	27 左角骨
10 左方骨	19 臀鰭血管間棘	



1 貝層出土の動物遺存体(1)



1 貝層出土の動物遺存体(2)

- | | | | | | |
|---|-----------|---|------------|----|----------|
| 1 | アナグマ右下顎骨 | 5 | ワシ類左中手骨 | 9 | オオバン右大腿骨 |
| 2 | ヒシクイ類烏口骨 | 6 | 同右中手骨 | 10 | 種不明左脛骨 |
| 3 | ヒシクイ類左中手骨 | 7 | 同左第III指基節骨 | | |
| 4 | カモ類左尺骨 | 8 | 同右第II基節骨 | | |

- | | | | | | |
|---|------|----|------|----|-----|
| 1 | 左下顎骨 | 6 | 右橈骨 | 11 | 右脛骨 |
| 2 | 頸椎 | 7 | 左中手骨 | 12 | 中走骨 |
| 3 | 左肩甲骨 | 8 | 大腿骨 | 13 | 基節骨 |
| 4 | 右上腕骨 | 9 | 大腿骨 | | |
| 5 | 右橈骨 | 10 | 右踵骨 | | |



1 貝層出土の動物遺存体(3)



1 貝層出土の動物遺存体(4) 1：イノシシ，2～13：ニホンシカ

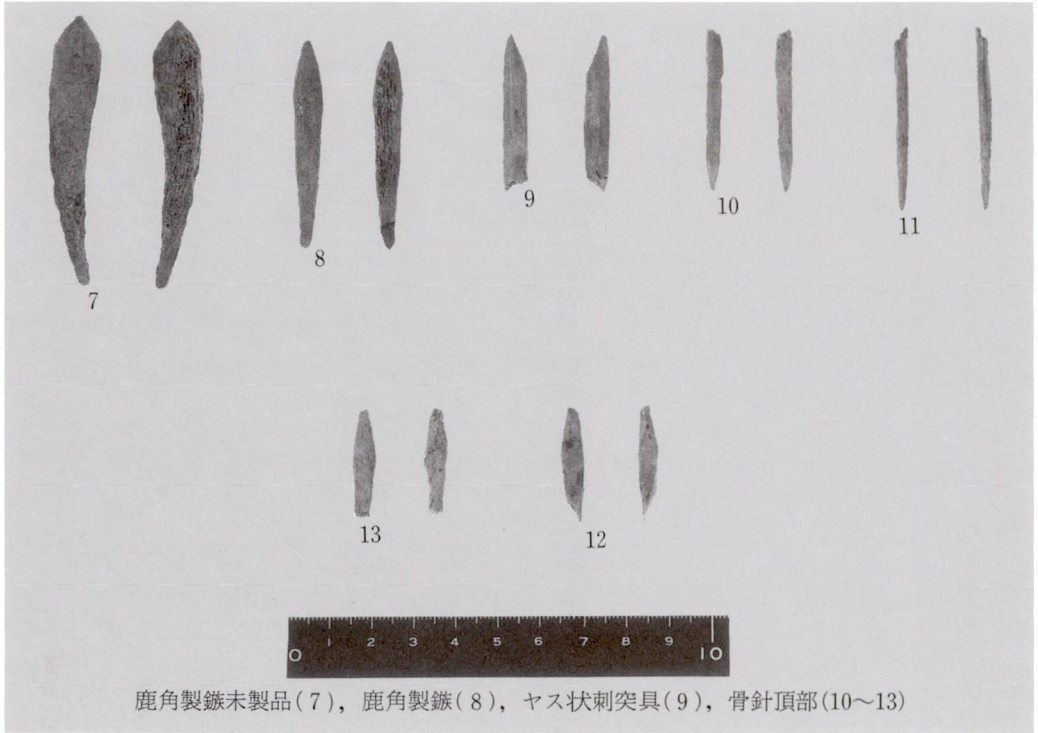
- | | | | | | |
|---|------------------|---|-------------|----|---------|
| 1 | 角座部分 | 5 | 半割された角幹部 | 9 | 上部切断 |
| 2 | 角冠部分（矢印部分に線刻がつく） | 6 | 上・下端切断 | 10 | 折られた枝部分 |
| 4 | 切断された枝部分 | 7 | 縦溝を付けられた枝部分 | | |



1 貝層出土の骨角製品(1)



1 貝層出土の骨角製品(2)



1 貝層出土の骨角製品(3)

発掘調査関係者

水戸市教育委員会教育長	堀川賢壽
水戸市教育委員会教育次長	中川實
水戸市教育委員会生涯学習課	
課長	小川誠之
課長補佐兼文化振興係長	角田重美
文化振興係主幹	岡田豊明
〃	〃
	宮崎賢司

発掘調査および整理作業従事者

担当者 井上義安（日本考古学協会員・ひたちなか市文化財保護審議会委員）

補佐員 鈴木浩子 飛田信雄 江橋和子 石崎洋子
安真奈美 仁平妙子 山村京 直江康雄

作業員 鴨川清一 大川重信 石崎寿子 蔀登喜子
雨貝直子

水戸市大串遺跡

発行	平成八年三月
編集	井上義安
印刷	株式会社 あけぼの印刷社

題字 堀川賢壽 水戸市教育長

